

長野遺跡群

# 善光寺門前町跡(4)

—八幡屋磯五郎大門町店増築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2016年3月

長野市教育委員会



長野遺跡群

# 善光寺門前町跡(4)

—八幡屋磯五郎大門町店増築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2016年3月

長野市教育委員会



# 序

日本最古と伝わる一光三尊阿弥陀如来像、いわゆる善光寺如来像を本尊とする善光寺は、日本を代表する仏教寺院の一つであり、国宝に指定されている本堂をはじめ、重要文化財の三門・経蔵など、境内には貴重な歴史的建造物が多数残されています。中世以降の浄土信仰や女人救済思想の影響、鎌倉幕府の保護、善光寺聖の勧進や出開帳などによって、「牛に引かれて善光寺詣り」「一生に一度は詣れ 善光寺」と言われるように、古来から多くの参拝客で賑わってきました。現在では、日本全国はもとより、海外からの観光客も増え、年間約600万人もの多くの老若男女が訪れるようになりました。

本書に所収しております善光寺門前町跡は、古くは古墳時代の遺構も見つかっていますが、中世以降に人・モノ・情報が集積する長野盆地の中核地として発展してきた門前町です。近年、観光客の賑わいに呼応するように参道の石畳化や周辺建物の建て替えなどの各種開発工事が増えつつあり、賑わいにますます拍車がかかっているようです。

このたび、平成19年に発掘調査を実施しました店舗の増築工事が行われることになり、開発業者との保護協議を経て、記録保存を目的とした発掘調査を行いました。長野市の埋蔵文化財第142集として刊行いたします本書には、その成果が詳しく掲載されております。連綿と綴られてきた人々の歴史のほんの一部にすぎませんが、地域史解明の一助としてお役立ていただければこの上ない喜びであります。


最後になりましたが、埋蔵文化財の保護に対する深いご理解と発掘調査に際して多大なご尽力を賜りました、開発業者である株式会社八幡屋磯五郎の皆様、実際の作業にあたりご理解・ご協力を賜りました調査地近隣の皆様、発掘作業に携わっていただきました発掘作業員の皆様、また報告書刊行に至るまでご支援・ご指導賜りました関係機関・諸氏に厚く御礼申し上げ、本書の上梓をもってご挨拶にかえさせていただきます。

2016(平成28)年3月

長野市教育委員会  
教育長 近藤 守



# 例 言

1. 本書は、株式会社八幡屋礒五郎による八幡屋礒五郎大門町店増築工事に伴い、記録保存を目的として実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 埋蔵文化財発掘調査の実施に関しては、株式会社八幡屋礒五郎と長野市との間で協定及び委託契約を締結し、平成26年度に発掘作業、平成27年度に整理及び報告書作成を実施したものであり、業務は長野市教育委員会(文化財課埋蔵文化財センター担当)が履行した。
3. 発掘調査地籍は、長野市長野大門町86-1他で、起因となった開発事業面積178㎡全域を保護対象面積とし、そのうち133㎡を発掘調査対象面積として調査を実施し、実質調査面積は120㎡である。
4. 測量業務は株式会社写真測図研究所に委託した。本書の図中の座標・標高は、平面直角座標系の第Ⅷ系座標値(日本測地系2000)と、日本水準原点の標高に基づく。
5. 本書に実測図を掲載した遺物は掲載番号を通し番号とし、金属製品についてはX線撮影の番号を別に付した。
6. 本書の編集執筆は飯島の指導の下、田中が担当した。遺構図整理・遺物整理・表作成・遺物写真撮影等は田中と向山純子で行った。
7. 本書図中に用いたトーンは以下の通りである。  

8. 発掘調査で得られた諸資料は長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センターが保管している。なお遺跡略号は「NGYZ」としている。

# 目次

序文・例言・目次	
第Ⅰ章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯と調査経過	
第2節 調査体制	
第3節 調査日誌	
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	4
第1節 地理的環境	
第2節 歴史的環境	
第Ⅲ章 調査成果	8
第1節 調査概要	
第2節 遺構	
第3節 遺物	
第Ⅳ章 まとめ	13
報告書抄録・奥付	





# 第 I 章 調査の経過

## 第 1 節 調査に至る経緯と調査経過

善光寺の門前町一帯は、古くからの町屋としての町割りが残る歴史的な景観を見せている地域で、近年は街並み環境整備事業などによって石畳風道路や建物の美観化が進んでいる。中央通沿いに軒を並べる八幡屋磯五郎大門町店は、平成 19 年の店舗新築工事の際に発掘調査を実施しており、長野市の埋蔵文化財第 121 集として報告書が既に刊行されている。今回その店舗の増築工事が計画され、開発事業者である株式会社八幡屋磯五郎から埋蔵文化財の取り扱いに関する照会がなされたのは、平成 25 年 12 月 2 日に遡る。翌年 1 月 9 日に既存建物の解体工事の際に近世末期以前の遺物包含層を確認したことから、2 月 24 日付で文化財保護法第 93 条の規定に基づく届出が提出され、27 日付で保護措置として「発掘調査」を指示した。その後、保護協議を重ねる中で、平成 26 年度に現地における発掘作業を実施し、整理作業と報告書の刊行を平成 27 年度とする「埋蔵文化財発掘調査協定書」を 4 月 14 日に締結した。16 日付で平成 26 年度分の「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を締結し、現地での発掘調査は 4 月 17 日から 6 月 3 日までの 48 日間実施した。平成 27 年度分は平成 27 年 4 月 6 日付で委託契約を締結し、整理調査を実施して本書を刊行した。

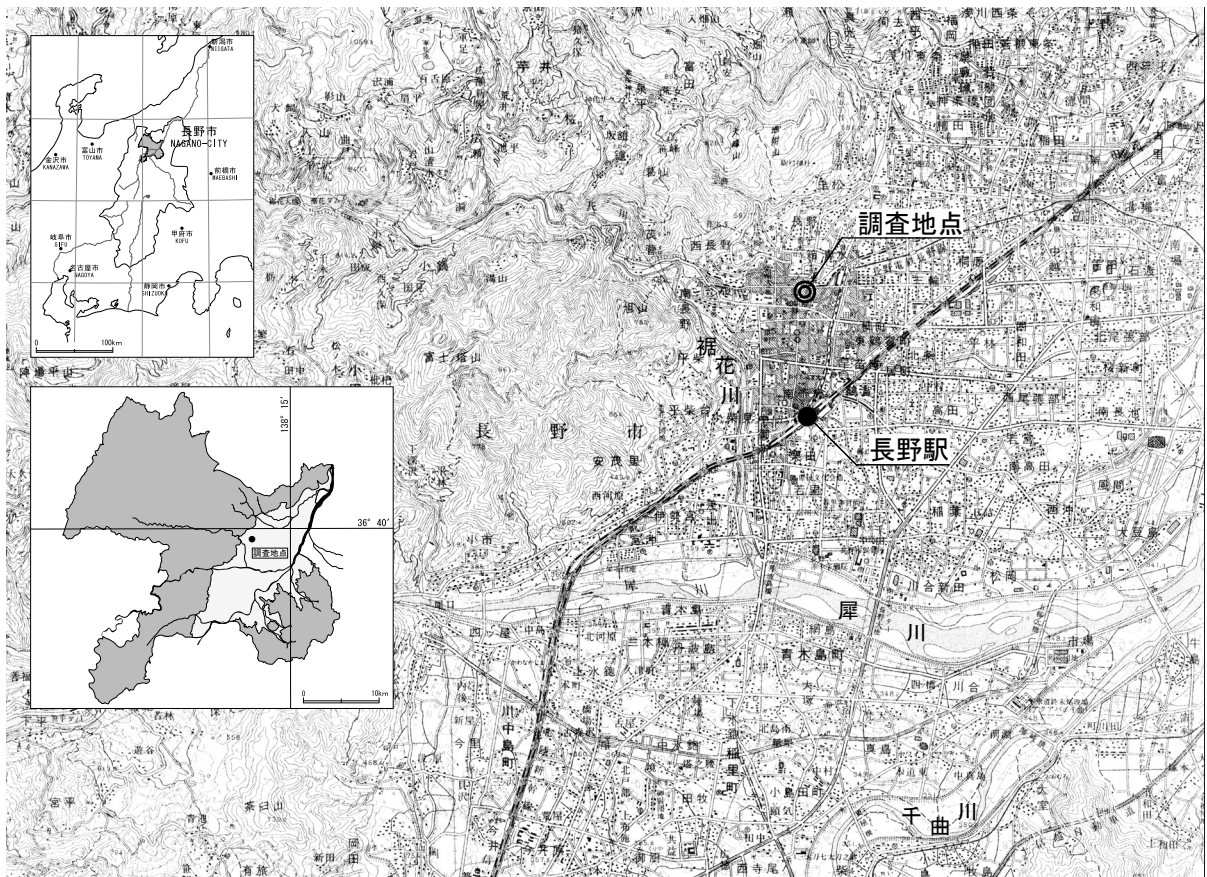


図 1 調査位置図 (S = 1/100,000)

## 第2節 調査体制

本調査は、長野市教育委員会の直営事業として長野市埋蔵文化財センターが実施し、その組織は以下のとおりである。なお発掘調査に使用する大型重機・機材等は、事業者（調査依頼者）から提供を受けた。

調査主体者	長野市教育委員会	教 育 長	堀内征治（～H26.3）	近藤 守（H27.4～）
調査機関	文化財課	課 長	青木和明	
	埋蔵文化財センター	所 長	小山敏夫	
	庶務担当	係 長	竹下今朝光	
		事務職員	大竹千春	
	調査担当	係 長	飯島哲也（調査担当者）	
			風間栄一	
		主 事	小林和子	
		専 門 員	柳生俊樹 高田亜紀子 田中暁穂（主任調査員）	
			遠藤恵実子 日下恵一 篠井ちひろ 清水竜太	
発掘作業員	伊藤咲子 江守久仁子 岡沢貴子 岡宮純子 駒村文男 杉本千代 諏訪里子 峯村茂治 村田岳仁			
遺構測量委託	株式会社 写真測図研究所			
石材鑑定	長野市立信州新町博物館	係 長	畠山幸司	
X線写真撮影	長野県立歴史館			

発掘調査事業の委託者である株式会社八幡屋礒五郎におかれては、埋蔵文化財保護に対する深いご理解に基づき、重機等の提供を含め円滑に調査事業を実施できるよう多大なるご配慮を賜った。整理作業においては長野県立歴史館 白沢 勝彦氏にX線写真撮影についてご指導を賜った。陶磁器・土器については長野県埋蔵文化財センター市川隆之氏より御教示賜った。調査にご協力頂いた各位に記して厚く御礼申し上げる。



写真1 発掘作業に参加された皆さん

### 第3節 調査日誌

- 4月17日 器材搬入、重機による表土除去開始  
22日 作業員による遺構検出開始  
23日 1次面遺構検出状況撮影  
24日 遺構調査開始  
28日 1次面全景撮影
- 5月1日 遺構測量  
7～13日 重機による包含層掘削開始、山留工・汚水切回し等行う  
14日 作業員による遺構検出、2次面遺構検出状況撮影  
15日 遺構調査  
16日 2次面全景撮影、遺構測量  
19日 重機による包含層掘削開始、山留工  
20日 作業員による遺構検出  
22日 3次面遺構検出状況撮影  
23日 遺構調査開始、調査区内雨水除去のため沈澱槽・水中ポンプ設置  
30日 3次面全景撮影、遺構測量
- 6月2日 東調査区の重機による表土掘削、1・2次面調査・測量  
3日 2・3次面遺構調査・測量、器材撤収して調査を終了



写真2 表土除去



写真3 作業風景(1)



写真4 作業風景(2)

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

長野遺跡群は裾花川河岸段丘と湯福川扇状地による複合地形上に立地する。裾花川・湯福川はどちらも北西—南東方向の流路で、裾花川は現在の里島付近から小河川に分流していた。これらの川を古代から用水として利用していたのである。近世初頭に松城（後の松代城）城代花井吉成により現在の南下する河道に整備変更された。湯福川も宝永4年（1707）の善光寺本堂移転を機に現在の流路へと変更されたが、それ以前は図3にあるように旧本堂の北東を通る、直線的な流路であったと推定されている。湯福川扇状地は裾花川河岸段丘を覆って急傾斜をなし、調査地を含む善光寺門前町跡周辺においては北西から南東に傾斜している。地盤は岩塊をふくむ砂礫堆積で水はけがよく堅致である。周辺の発掘調査では、善光寺門前町形成以前から居住域として利用されていたことが確認され、生活に好適な環境であったと捉えられる。

善光寺周辺では善光寺とその門前町を形成・維持するため、地形の傾斜を水平に修正するための造成に大量の石塔類が使用され、火災後の整地などの地業も確認できる。弘化4年（1847）の火災による塵芥処理のため空閑地に埋設した例は調査の中で多く見受けられる。本調査地点も門前町の北端を東西に横切る横町通りに面しているが、通りに沿って弘化4年の火災に伴う廃棄土坑が検出された。当時の絵図等では調査地点が町屋地域に含まれることは確認できるが、具体的に空閑地であったかは不明である。近代においては参道に面して商店が並び、調査地点はその裏手にあたり、横町通りに沿ってやや東よりに小規模な店舗があったと想定される。調査区内においても地形の北西—南東方向への傾斜が見られ、北側を削平し南側に盛土を行っていたと見られる。また南北方向の石組水路が調査区の東西端にあり、調査範囲がおおよそ町屋1軒分の間口に当たるものと推測される。

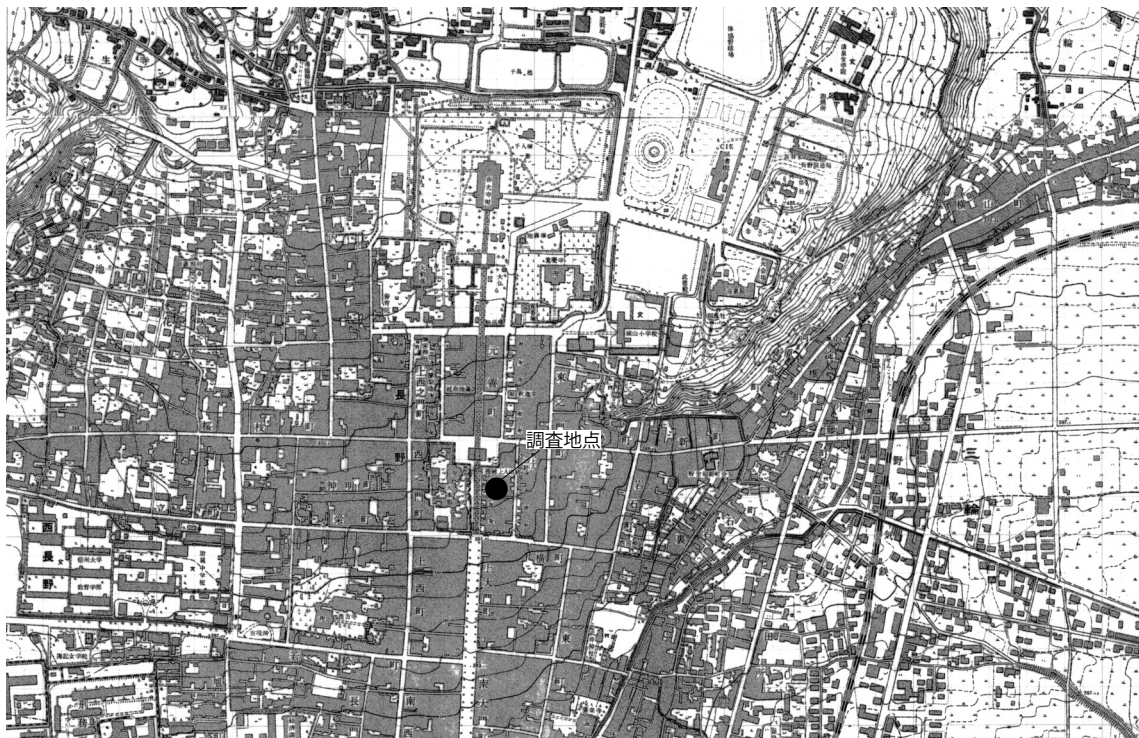


図2 地形図 (S = 1/10000)

## 第2節 歴史的環境

調査地周辺では、大規模な調査として平成7・8年に国道406号線・市道県庁大門町線の道路拡幅に伴う発掘調査（西町遺跡・東町遺跡）および、関連事業として中央通りの歩道改修事業の工事立会が行われている。その後も店舗建築・増築など小面積の調査の蓄積により善光寺門前町の様相が次第に明らかになりつつある。

**西町遺跡** 縄文時代から現代に至る遺構を確認した。遺構の重複が激しく、縄文時代から古代の遺構は遺存状態が悪い。中世段階の遺構は大門地区に集中する。13世紀から15世紀後半に相当し、門前町形成に関わると考えられる遺構・遺物である。近世段階は、火災整地および近代以降の建築物基礎により破壊され残存状態は悪いが、門前町の商工業に関連する遺構・遺物を確認した。

**東町遺跡** 弥生時代から近世に至る遺構を確認した。弥生・古墳時代の遺構は湯福川の氾濫堆積に厚く覆われているため遺存度がよい。この氾濫堆積上に中世・近世面を確認した。

**善光寺門前町跡** これまで竹風堂善光寺大門店地点（以下、竹風堂地点）・八幡屋磯五郎大門町店地点・店舗併用住宅地点で調査が行われた。いずれも善光寺参道に面した重要な位置にある。西町遺跡A地区で検出された溝SD1は竹風堂地点区画溝（SD1）と平行する位置関係にあり時期も同じ（13世紀後半）ことから当時、善光寺を中心とする一帯に土地整理事業が行われ、それは12世紀末の善光寺再興にともなうものであったと想定する。八幡屋磯五郎大門町店地点においても溝跡は検出されており、参道脇南北方向の溝である。時期としては14世紀～16世紀末と推定されている。店舗併用住宅地点では14世紀後半～近代の遺構が見られた。

**元善町遺跡** 近世以前の善光寺本堂推定範囲であるため、古代瓦の出土量は著しい。大本願明照殿地点では近江の湖東式瓦が出土している。本調査地点とは参道を挟んで近接し、古代～近代の遺跡である。

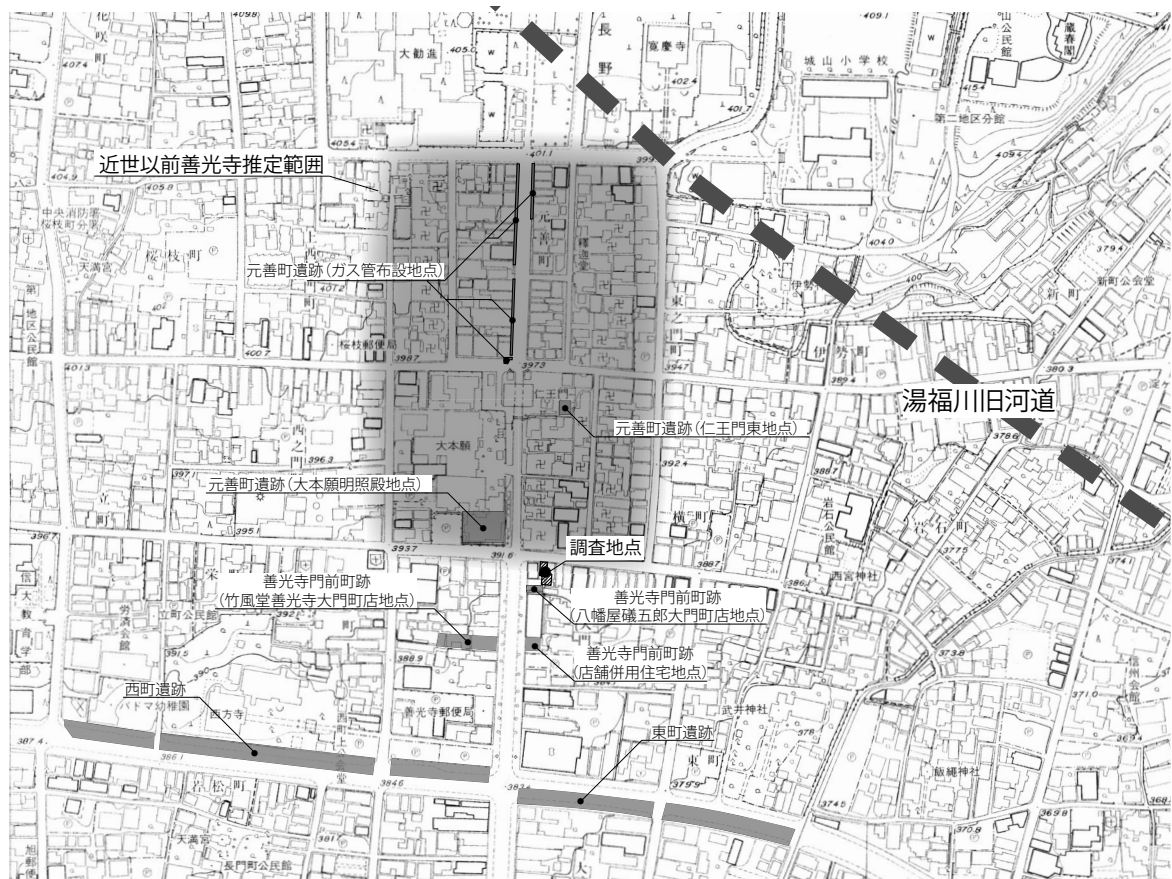


図3 周辺の遺跡と今回調査地点 (S = 1/5000)

## 善光寺の成立

善光寺の僧職である「善光寺別当」が初めて文献史料に登場するのは1096年の記録（『後二条師通記』）である。それ以前の善光寺については『善光寺縁起』、平安時代の仏教説話集（『僧妙達蘇生注記』等）、本尊の様式、旧境内から出土した古代瓦から推測されるにすぎない。平安時代末期から中世にかけては極楽浄土の教えが広まった時代であり、11世紀末頃に中央の大寺院園城寺の末寺となった善光寺は阿弥陀信仰の霊地として次第に発展していった。しかし1179年、火災によって寺は消失し礎石を残すのみとなった（『吾妻鏡』）。1191年源頼朝の命により再建され、その後も時の権力者の庇護を受けた。戦国時代末期には上杉謙信・武田信玄が本尊を移したことにより一時衰退したが、江戸時代に入り再興された。元善町にあったそれまでの本堂が今の位置に造営されたのは1707年（宝永4）のことである。

## 門前町の成立

善光寺は、宝永4年（1707）までは今の元善町に本堂があり、県道豊野線は本堂に直行する参道であった。また、現本堂が位置しているところには北之門町があり、本堂の移転に伴って立ち退きとなった。このように、移転以前の善光寺門前町は、本堂を中心に東西南北の参道に沿って発達していたことがうかがえる。この景観は、参道に参詣者目当ての商人・職人が集住したのがはじまりであると考えられ、その後商業地として特化したものである。西町遺跡や門前町跡の発掘調査成果からは堅穴建物・陶磁器・渡来銭が出土し、門前町としての成立が13世紀『一遍上人絵詞』と一致することがわかる。『大塔物語』には応永6年（1399）信濃守護職に就いた小笠原長秀が、同7年（1400）善光寺に入り、国内に向けて指示を行ったことが描かれる。その際に「凡そ善光寺は、三国一の霊場にして（中略）門前に市をなし、堂上花の如く」道俗男女・貴賤上下でにぎわう様子が書かれている。

江戸時代に入ると北国街道の本格的な整備に伴い、善光寺宿には本陣が置かれ、大門町は旅籠屋営業の特権を持つこととなる。18世紀に入る頃には参道の両脇に旅籠が立ち並ぶようになる。文政10年（1827）に出版された『諸国道中商人鑑』中仙道・善光寺之部には、この他にも飲食店や薬・金細工・刀・呉服・茶など様々な店が掲載されており、大門町の繁昌ぶりがわかる。近代に入って、現在の国道403号線より北の参道、中央通沿いには23軒の商店が軒を連ね、銀行・書店・洋品店も出店している。この中で目立つのは洋品を扱う商店で、洋酒や煙草・ランプ・雑貨など様々で、近代の文化が善光寺の周辺にも波及していたのである。現在も江戸時代から続く老舗が残り、日本のみならず海外からの観光客が訪れて賑わいを見せている。



写真5 現在の門前町

西 曆	和 曆	善光寺・門前町に関する事象	時 代
9世紀後半		瓦葺きの建物が存在（善光寺前身寺か？）	平 安
1179	治承 3	火災により善光寺焼失（『吾妻鏡』）	
1187	文治 3	源頼朝が信濃国目代等に善光寺再興を命じる（『吾妻鏡』）	
1191	建久 2	善光寺再建落成（『吾妻鏡』）	
1268	文永 5	善光寺で火災（『栗田家記』）	鎌 倉
1313	正和 2	善光寺で火災（『立川年代記』）	
1370	応安 3	火災により善光寺全焼（『花宮三代記』）	室 町
1407	応永 14	宝塔再建（『三井統燈記』）	
1425	応永 32	火災により善光寺全焼（諸堂塔残らず焼失）（『看聞日記』）	
1427	応永 34	善光寺で火災（『王代記』）	
1474	文明 6	火災により如来堂焼失（『尋尊大僧正記』）	
1558	永禄 1	武田信玄が本尊を甲斐に移す（『甲州善光寺文書』）	
1597	慶長 2	豊臣秀吉が甲斐善光寺如来を京都方広寺大仏殿に移す（『甲斐善光寺文書』）	安土桃山
1598	慶長 3	本尊が信濃に戻される（『梵舜日記』）	
1599	慶長 4	豊臣秀頼が如来堂を再建（『当代記』）	
1601	慶長 6	徳川家康が善光寺に千石の領地を与える（大門町を含む）（『栗田文書』）	江 戸
1615	元和 1	落雷により本堂（如来堂）焼失、諸堂・寺中全焼（『御還座縁起』）	
1642	寛永 19	仮堂が焼失（『善光寺記録』）	
1650	慶安 3	如来堂仮堂を再建（『善光寺旧事見聞記』）	
1666	寛文 6	仮本堂（寛文如来堂）を再建	
1688	元禄 1	東之門町から出火、横町等焼失（『唐沢氏文書』）	
1692	元禄 5	本堂再建の為の出開帳が寺社奉行より認可される（『如来三都御回国御開帳日記』）	
1700	元禄 13	火災により再建中の本堂・焼失（『大勸進文書』）	
1705	宝永 2	西之門町より出火、大本願・三寺中・東之門町等焼失（『長野史料』）	
1707	宝永 4	本堂再建（『善光寺本堂建立由来留書』）	
1750	寛延 3	三門再建（『さざれ石』）	
		堂庭の販売商品について、大門町から訴えあり（『長野市史考』）	
1751	宝暦 1	西之門町より出火、大本願・町屋一帯 1500 軒を焼失（『観音堂縁起』）	
1759	宝暦 9	経蔵落成（『別当伝略』）	
1830	天保 1	宿坊と大門町が旅客の宿泊について争う（『大勸進文書』）	
1846	弘化 3	大門町以外の宿屋営業を禁ずる（『長野市史考』）	
1847	弘化 4	善光寺地震により家屋 3000 戸、仁王門・大本願等焼失（『むし倉日記』）	
1864	元治 1	仁王門再建（『善光寺取調書』）	
1871	明治 4	上知令により善光寺領を中野県（のち長野県）に編入	近 代
1891	明治 24	5.24 東之門町から出火、伊勢町・岩石町・元善町焼失 6.2 上西之門より出火、仁王門・大本願・院坊・元善町等焼失	
1908	明治 41	本堂特別保護建造物に指定	
1918	大正 7	仁王門再建	
1953	昭和 28	本堂が国宝に指定	現 代
1965	昭和 40	三門・経蔵が重要文化財に指定	

表 1 善光寺関連の年表

# 第Ⅲ章 調査成果

## 第1節 調査概要

今回の発掘調査地は大門町東横町通りにあり、これまでの門前町跡の調査地点とは異なり、小路に面した敷地である。調査範囲は概ねL字形をしているが、通りに面した位置には以前は別の店舗があった。また東の張出し部分は地下室があったため、南半分は攪乱を受けていた。試掘調査の結果に基づき、遺構検出面を設定、重機で表土を除去し、その後遺構検出及び遺構掘り下げを人力で行った。検出した遺構の中で特に掘削深度の大きいもの、巨礫が混入するものについては作業上の安全面を考慮して未完掘である。遺構の記録保存について、遺構実測図作成に係る測量を株式会社写真測図研究所に業務委託し、調査員が現地で作図した。調査区東部分については平面図を平板測量により、作図した。遺構写真撮影は35mm一眼レフカメラ、モノクロネガ・リバーサルフィルムを用い、補助として一眼レフデジタルカメラを用いた。

基本層序は図4に示した。遺構確認面は3面を設定し、各面の地表面からの深度は1次面が約30cm、2次面が約50cm、3次面が約70cmである。出土遺物の年代に基づき、1次面は幕末～近代、2次面は18世紀代、3次面は中世・17世紀代と判断した。各層は黄灰あるいは暗褐色シルトで、焼土や炭化物・礫を含み、火災後の整地層と見られる。各層の年代に関しては、近接する元善町遺跡大本願明照殿地点の各遺構検出面の年代に対応することが判明した。

調査区内は近世～近現代の段階での改変が著しく、特に礫の取り扱いには苦慮した。礫について遺構か攪乱か極力現場で判断したが、報告書作成段階で各層の平面図照合により、建物基礎と確認できた。このため、建物跡1～3は遺構通しNo.を付していない。建物跡は掘削痕跡が明瞭でなく、出土遺物も僅少であるため、基礎構造を考慮して根石や造成が初めて確認された層を建物構築時期として捉えた。

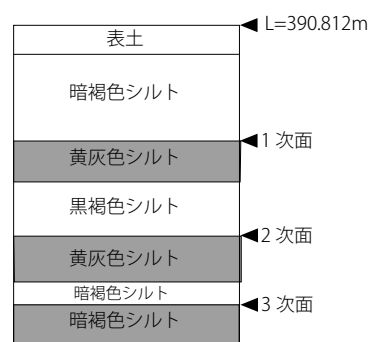


図4 基本層序 (S = 1/20)

## 第2節 遺構

### (1) 1次面

幕末～近代に至る面で、遺構は南北方向の石組水路、石列1・2、石列3・4が検出された。長さ約50cm～1m程度の自然礫や整形した礫を用いている。善光寺周辺の町割も兼ねた水路には現在でもこの石組が見受けられる。調査範囲中央付近には構築年代が不明だが近代と見られる井戸があり、その北側に石組遺構1号遺構が検出された。1号遺構の、井戸と対応する位置には一部石組が欠けた部分があり、井戸と繋がる構造になっていて水場遺構である可能性がある。井戸の南には東西方向の石列があり、この石列は3次面まで同位置に見られる。3次面では遺存状態が良好なため、石列の端部から北へ延伸が見られ、それに対応する石列が北西にも検出されている。この石列は1次面で構築された倉庫や土蔵の根石であると考えられる(建物跡1)。また調査区西端には地下室の一部が検出され、調査区外へ続くと見られる。調査区北東隅には褐色土が充填された方形土坑65号遺構があり、



面	遺構番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	平面形	断面形	覆土	時期	備考
1	1号遺構	(150)	128	60~65	方形	方形	単層	幕末以降	井戸に付属する水場遺構カ
1	2号遺構	44	28	12	楕円形	逆台形	単層		
1	3号遺構	56	48	16	楕円形	逆台形	単層	18世紀	肥前系染付・瀬戸・美濃系陶器
1	4号遺構	26	23	16	円形	方形	単層	18世紀	肥前系陶器・染付
1	5号遺構	34	33	38	円形	U字状	単層	18~19世紀	肥前系染付・産地不明型打成形陶器皿
1	6号遺構	30	27	14	円形	U字状	単層		
1	62号遺構	318	(72)	106	方形	方形カ	単層	幕末以降	石組地下室
1	建物跡1	330	260	—	方形	—	—		建物基礎根石残存、石抜き取り痕
2	7号遺構	26	—	16	円形カ	U字状	単層	17世紀後半	西壁セクションで検出
2	8号遺構	27	23	18	円形	U字状	単層	17世紀後半	
2	10号遺構	43	(12)	13	楕円形	半円形	単層		
2	11号遺構	33	32	8	円形	半円形	単層		
2	12号遺構	58	34	16	楕円形	皿状	単層		
2	13号遺構	34	26	15	楕円形	U字状	単層		
2	14号遺構	27	(16)	22	楕円形	U字状	単層		
2	15号遺構	32	22	22	方形	U字状	単層		
2	42号遺構	30	26	8	円形	U字状	単層		
2	43号遺構	34	30	40	円形	有段筒状	底面に礫有		
2	44号遺構	22	19	44	楕円形	U字状	単層		土器皿
2	45号遺構	52	40	20	楕円形	U字状	単層		
2	46号遺構	34	29	33	円形	U字状	単層		
2	47号遺構	30	26	18	円形	U字状	柱痕有		土器皿、内耳鍋
2	48号遺構	22	22	28	円形	U字状	単層		
2	49号遺構	21	14	10	方形	方形	単層		
2	建物跡2	(310)	220	—	方形	—	—		建物基礎根石残存、基礎内部黄色砂人為堆積
3	66号遺構	50	47	10	円形	方形	単層		>30号遺構、調査時は15号遺構付替え、土師器
3	16号遺構	36	35	12	円形	U字状	レンズ状・複層	15世紀	
3	17号遺構	32	27	15	楕円形	半円形	単層	15世紀	>28号遺構
3	18号遺構	20	18	31	円形	U字状	柱痕有	15世紀	>30号遺構
3	19号遺構	34	28	50	楕円形	皿状	単層		
3	20号遺構	26	24	12	円形	V字状	単層		
3	21号遺構	38	34	42	円形	U字状	単層		
3	22号遺構	44	36	26	円形	逆台形	単層	近世	
3	23号遺構	34	32	17	円形	U字状	単層	中世	
3	24号遺構	28	24	10	円形	逆台形	単層	中世	>32号遺構
3	25号遺構	90	88	21	円形	皿状	単層	15世紀後半	>30・31号遺構、土器皿
3	26号遺構	54	46	12	楕円形	皿状	単層		
3	27号遺構	36	34	20	円形	方形	単層		=28号遺構
3	28号遺構	216	20~30	12~16	L字溝状	方形	単層		=27号遺構
3	29号遺構	64	26	—	方形	皿状	単層		
3	30号遺構	(464)	50~78	12	溝状	弧状	単層	13~14世紀	<18・66・25・64号遺構、灰釉陶器、手づくね土器皿、須恵器、土師器
3	31号遺構	(232)	60	30	溝状	逆台形	単層	15世紀後半	<64号遺構、土器皿、瓦器
3	32号遺構	250	70~90	22~24	溝状	弧状	単層	17世紀	<24号遺構、古代瓦、肥前系陶器
3	33号遺構	60	30	8	楕円形	皿状	単層	中世	
3	34号遺構	24	26	8	円形	U字状	単層		
3	35号遺構	54	—	38	円形	U字状	単層		>40号遺構
3	36号遺構	26	22	26	円形	U字状	単層		
3	37号遺構	34	32	10	円形	半円形	単層		>38号遺構
3	38号遺構	36	34	10	円形	逆台形	単層		<37号遺構
3	39号遺構	(446)	(78~136)	40	溝状	逆台形	単層	15世紀	<36・40・41号遺構
3	40号遺構	(550)	(130~250)	24	溝状	弧状	単層	15世紀	>39号遺構、<35・41号遺構
3	41号遺構	(286)	(110~180)	—	方形カ	底面まで掘削不可	単層	17世紀	>39・40号遺構、土器皿、内耳鍋、肥前系染付、瀬戸・美濃系陶磁器、京信系陶器など
3	50号遺構	65	51	15	方形	逆台形	底面に礫有	中世カ	古代瓦、土器皿
3	51号遺構	110	96	13	円形	皿状	単層		
3	52号遺構	180	133	40	楕円形	皿状	レンズ状、複層	17世紀前半	炭層
3	53号遺構	40	33	28	楕円形	U字状	単層	中世	土器皿
3	54号遺構	34	32	22	円形	U字状	単層	17世紀前半	
3	55号遺構	20	20	13	円形	U字状	柱痕有	中世	土器皿
3	56号遺構	30	26	18	円形	漏斗状	柱痕有	中世	土器皿
3	57号遺構	31	38	29	楕円形	U字状	単層	中世	土器皿
3	58号遺構	44	38	14	楕円形	U字状	柱痕有		
3	59号遺構	28	22	—	楕円形	V字状	単層		
3	61号遺構	37	36	16	円形	U字状	複層		
3	63号遺構	56	55	28	円形	漏斗状	単層		
3	64号遺構	58	48	12	楕円形	弧状	単層		>30・31号遺構
3	65号遺構	(248)	(170)	—	方形	底面まで掘削不可	単層	19世紀代	弘化4年(1847)火災の塵芥処理坑、赤褐色の覆土、被熱により変色・変形した遺物
3	建物跡3	(240)	250	—	方形	—	—		建物基礎根石残存、根石抜き取り痕

表2 遺構観察表

出土遺物の年代より弘化4年（1847）の大火の廃棄土坑と考えられる。出土した陶磁器は被熱したものが多く釉薬の変色や変形が見られる。また被熱した壁材なども出土した。

## (2) 2次面

遺構分布は少なく、ピットが見られる程度であるが、調査区西壁中央付近で、径約10cm、長さ80cm前後の先端を鋭利に切削した木杭が集中して打込まれている部分が見られた。削平された部分もあり、その全体を把握することは出来ないが、南北1.2m、東西80cmの範囲に32本の杭が打込まれ、そのうち数本は紐により束ねられていた。目的は不明なものの、捨杭などの基礎地業などが推測される。65号遺構の南には、東西3m、南北2.3m規模の、周囲と覆土が異なる範囲が検出された。南東部は1号遺構により削平されている。覆土はやや細粒の均質な黄色砂であり、人為堆積の可能性はある。何らかの建物跡と考えられ、建物跡2とした。

## (3) 3次面

17世紀代の検出面であるが、中世の遺構も確認された。最も古いのは30号遺構で手づくね土器皿や土師器・須恵器が出土している。13～14世紀の遺構と判断した。南端に位置する溝状遺構39・40号遺構は15世紀代の所産である。出土遺物はほぼ同時期であるが、切合いにより39号遺構が古いと判断した。39号遺構は東西に走行し、調査区外に続く。恐らくは八幡屋磯五郎大門町店地点で検出されているSD01に接続していたと思われる。遺構断面形は逆台形で部分的に北側に中場が設けられ、木杭列も見られた。40号遺構は北岸は調査されたが南岸は調査区外のため、全体を把握することは出来なかった。両者は17世紀代の性格不明遺構、41号遺構により削平されている。41号遺構は調査した範囲では方形を呈する遺構と推測されたが、非常に深く、湧水があったため完掘することが出来なかった。覆土からは17世紀前半を主体とする土器・陶磁器類、木製品・金属製品などが出土したが、15世紀代の遺物も含まれ、39・40号遺構の遺物が混入していると考えられる。建物跡の可能性を指摘しておく。52号遺構は長軸1.8m、短軸1.33m、深さ40cmの土坑である。焼土・炭化物を多量に含む。17世紀前半～半ばの年代の陶磁器が出土した。1号遺構の下層において東西方向の石列が確認された。32・33号遺構は石列北西隅に接続し、南下する位置にあり、根石が埋設されていたと見られ、建物基礎と判断した（建物跡3）。32号遺構からは17世紀前半の肥前系陶器皿が出土している。

# 第3節 遺物

## (1) 概要

古代の遺物は中世・近世の遺構に混入して出土し、ほとんどが小破片である。

中世遺物の年代は15世紀代が主体である。土器では在地の皿・内耳鍋、陶磁器は国産陶器である古瀬戸・大窯、中国産の青磁・白磁が出土した。また瓦器火鉢が3点出土しているが、竹風堂地点SK6でも出土しており、14世紀後半～15世紀の年代が示されている。土器皿は30号遺構で手づくね成形の製品が出土したが、他の土師器・須恵器とともに混入の可能性が高い。この他の土器皿はロクロ成形で、出土遺構は39・40号遺構に集中している。

近世以降は17世紀～20世紀までの遺物が出土している。陶磁器に関しては、全体として安価な大量生産品が主体であり、碗の比率も多い。しかし、一般集落や町屋では使用しないような大皿や器高が25cmになる花瓶が出土している。また組と思われる同一製品も散見し、調査区の南西に位置する本陣や参道に面した店などで使用されていた仕器の廃棄も考えられる。遺物の分類・編年については、肥前系陶磁器は大橋康二氏（九州陶磁学会2000）、瀬戸・美濃系陶磁器は藤澤良祐氏、美濃焼の一部については窯ヶ根窯調査報告書（土岐市教委2006）、近

代瀬戸・美濃系陶磁器は長佐古真也氏、越中瀬戸焼は宮田進一氏の編年を参照した。

## (2) 古代

30号遺構で土師器・須恵器の小片が出土しているほかは、造成土に混入していたと思われる古代瓦が見られる。

## (3) 中世

**土器皿** 手づくね成形が30号遺構から出土している。このほかはほぼロクロ成形で回転糸切されている。しかし口縁～体部の整形方法は分類ができる。①ロクロナデで口縁が外傾するように整形するタイプ、②口縁部を強くなでるタイプ、③体部下半に横方向のケズリを施すタイプが出土している。これらロクロ成形の皿は器形などが15世紀代の特徴を示す。40号遺構では古瀬戸後期の天目碗・中国産白磁皿と共伴している点で年代が一致している。

**陶磁器** 40号遺構出土の中国産白磁皿は口縁端反、見込に印花文が施されている。廃土出土の龍泉窯青磁碗も見込に印花文が見られ、いずれも15世紀代と見られる。40号遺構の天目碗は口縁のくびれがあまりなく、体部の開きも僅かに内湾する程度で、古瀬戸後期Ⅱ期、15世紀初めの製品である。3次面下層出土の83は体部内面に切込があるため卸皿と見られ、体部の直線的な器形、口縁端部の内面突出がない点で、古瀬戸中Ⅳ期の製品と考えられる。

**瓦器** 41号遺構出土の火鉢(121)は外面口縁付近にスタンプによる菊花文が施文されている。1号遺構からは2点の火鉢が出土しており、41もスタンプによる印花文が施文される。42は体下部に雷文が見られる。いずれも出土遺構は近世であるが、遺物の年代は中世後期と考えられる。しかし中世瓦器については奈良火鉢など広域流通品以外は胎土・色調・器形など形態が多様で、地域色も豊かである。このため分類・編年は未だ進んでいない。北信地域でも同様であり、現状では在地火鉢が普遍的に存在する中世後期としか限定できない。

## (4) 近世

1～3次面を通じて、陶磁器が主体で皿・鉢が多いように見受けられる。10寸を超える大皿も出土しており、明らかに一般集落や町屋の陶磁器組成とは異なる。しかし18世紀の碗については肥前系波佐見窯の大量生産品が出土している。19世紀以降は瀬戸・美濃系磁器染付が比率を高めていく。器種としては小杯や碗が多く、角皿や神酒徳利など多様化している。全時期を通じて産地は肥前系の比率が高いものの、瀬戸・美濃系製品が17世紀前半に定量を占め、確実に美濃焼と判明した製品もある(54)。19世紀以降には磁器製品において瀬戸・美濃系の比率が高くなる。3次面が17世紀前半の時期を含むため、越中瀬戸焼が出土している。肥前系とともに日本海流通と北信地域の関係性が窺える資料である。

特殊な器種としては1次面出土の25が挙げられる。底部のみなので推測であるが中国から輸入される菓の容器の可能性もある。2次面で出土した61は肥前系溝縁皿であるが、通常は62のように単独の皿として生産地から出荷されるが、61は2枚の皿が融着した状態である。掲載外の遺物だが、瀬戸・美濃系の磁器小杯に赤色顔料を入れたものが1号遺構から出土した。小杯は近代以降の製品であるが、赤色顔料の用途は不明である。60は2次面で出土した猪口で、幕末頃の製品である。底面に「するがや□□□□」という朱書がされている。朱書は焼継の際に焼継師が注文者名を記したものである。「するがや」については明治25年発行の『長野町勉強家一覧表』(図6)に広告が掲載されている。その広告によれば、するがや本店は「大門町上ノ角」とあり、支店は「横町大門ノ入口」とある。その表の他の部分に「大門町西側角ヨリ三軒目 するがや 鈴木小右衛門」

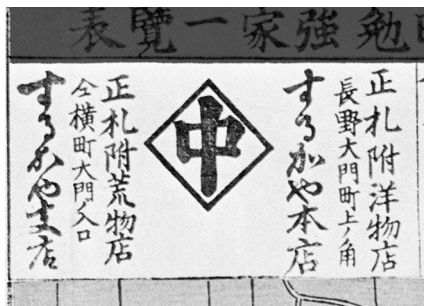


図6 長野町勉強家一覧

60は2次面で出土した猪口で、幕末頃の製品である。底面に「するがや□□□□」という朱書がされている。朱書は焼継の際に焼継師が注文者名を記したものである。「するがや」については明治25年発行の『長野町勉強家一覧表』(図6)に広告が掲載されている。その広告によれば、するがや本店は「大門町上ノ角」とあり、支店は「横町大門ノ入口」とある。その表の他の部分に「大門町西側角ヨリ三軒目 するがや 鈴木小右衛門」

という広告も見られた。取扱商品が同じなので、同一店舗を指すのかもしれないが、不明である。いずれにしてもどのような経緯を経てか、するがやの所有品が廃棄されたのだろう。

41号遺構の123は中世の内耳鍋と比較して器高が低く、破片のため内耳の有無は確認できなかったが、相伴遺物の年代である17世紀前半の所産と考えられる。

## (5) その他

様々な遺物が出土しているが、瓦は近世の燻瓦が多い。古代瓦は出土したものの量は少なく、近接する大本願明照殿地点とは様相が異なる。恐らくは古代以前の遺構の有無によると思われる。155～158は磁器や珠洲焼・土器片の側面を打ち欠き円形に近い形状に作られている。用途は不明ながら、砥石に見られる研磨痕もないため、遊具の可能性が高い。163は近代のガラス瓶であるが、無色透明・いかり肩という特徴は薬品瓶とされている（桜井2006）。気泡や底部の器厚の偏り（偏肉）は明治・大正期のガラス瓶に見られる特徴である。

石製品は石臼・五輪塔・宝篋印塔が出土した。これらの大型石製品は廃棄土坑と推測される41号遺構に投棄されていたり、石列に使用されていた。石臼は全て粉挽臼である。石塔は殆どが五輪塔であるが、171は宝篋印塔の中段の部位である塔身で、側面四方には金剛四界仏である「キリーク（不動明王）」「ウーン（阿閼如来）」「アク（不空成就如来）」「タラーク（宝生如来）」の種字が刻まれている。172も形状は宝篋印塔塔身であるが、四方に刻まれているのは全て「バン（大日如来）」の種字である。

金属製品は殆どX線撮影を行い、その63点中銭貨は23点である。寛永通寶が多く、中国銭の開元通寶や北宋銭の熙寧元寶・元祐通寶・至和通寶・天禧通寶が出土している。この他の金属製品は釘以外は不明なものが多く、家具や建具の部品と思われる。

木製品は湧水のあった41号遺構から出土した。何かの部材とは思われるが、掲載した2点以外は不明である。181は径24cm、厚さ0.8cmの曲物である。182も曲物で径14.8cm、厚さ1.2cmである。いずれも遺存状態は良くない。

## 第IV章 まとめ

今回の調査は、善光寺門前町跡では今まで調査されていない、小路に面した敷地で行われた。いわば参道という門前町のメインストリートではなく、一般的な町屋が並ぶ範囲であり、これまでの参道沿いの調査との比較検討が期待できるものである。中世では15世紀代の遺構・遺物が確認され、39・40号遺構で出土した土器皿については、改めて八幡屋磯五郎大門町店地点SD01出土のものと比較検討した結果、製作技法・器形等が共通しており、同時期と判断した。中世後期の善光寺門前町の街並みについて、今回の調査で明らかにすることはできなかった。これまで西町遺跡では中世の溝跡や竪穴建物跡が発見されているが、その他の門前町跡の地点などでは区画溝が主な遺構となっている。今回の調査でも狭小な調査区であるために、遺構の性格を判断することが難しく、40号遺構については溝跡の可能性を指摘したのみである。

幕末以降の建物配置としては竹風堂地点と共通点がある。通りから奥まった位置に井戸があり、更に奥に土蔵などが見られる点である。本調査区も近代の井戸が通りからは離れており、その奥に建物跡が検出された。西端の地下室は境界石組水路石列1・2を挟んでいるので、西隣の参道に面した敷地の施設と考えられるが、参道からは最も離れた位置になる。

出土した焼物は大量生産品を主体としながらも、径10寸を超える大皿や、17世紀前半には一般的な町人層が所有することが少ない器種である碗が見られ、この敷地の性格を考えるうえで重要な要素である。

各層は焼土・炭化物が多量に混入しているため、火災後の整地層であると推定される。各層の出土遺物の年代を調査地の所在する横町での火災の記録に照合すると、元禄元年(1688)横町などでの火災、宝暦元年(1751)大本願と町屋一帯の火災、弘化4年(1847)の善光寺地震とその後の火災があり、それぞれ3次面から1次面に時期が重なる。調査地が火災後の塵芥処理として利用された敷地であることも想定できるが、各層に建物跡が検出されているため、空閑地とは考えにくい。つまり出土した遺物はこの敷地に由来するものであって、また焼物の組成は一般的な町屋と評価することができず、むしろ参道沿いの店舗や旅籠などの敷地と解釈することができる。図5は慶応4年(1868)に官軍が北に進軍する際、善光寺宿である大門町に宿泊する時の宿の配置図である。本陣と記載されているのは、現在も大門町にある藤屋ホテルで、位置もほとんど変化していないと推測される。図ではその右隣(北側)に「わたや仁左衛門」と記され、文政10年(1827)に出版された『諸国道中商人鑑』中仙道・善光寺之部には「わたや仁左衛門 二王門前東かハより三軒目」とあり、この配置が少なくとも40年前まで遡ることがわかる。絵図に調査地を正確に重ねることは、難しいが大門町の角から南2軒と東2軒が調査地に当たるのではないだろうか。大正

14年の地図(図6)には御本陣であった藤屋ホテルの北隣に山田小間物店と見える。昭和27年に八幡屋磯五郎大門町店が出店した位置であるので、今回の調査地はその隣の深沢洋品店とその東の丸田屋洋服店の位置であるだろう。18世紀前半には藤屋が宿として大門町で開業しており、そのところに

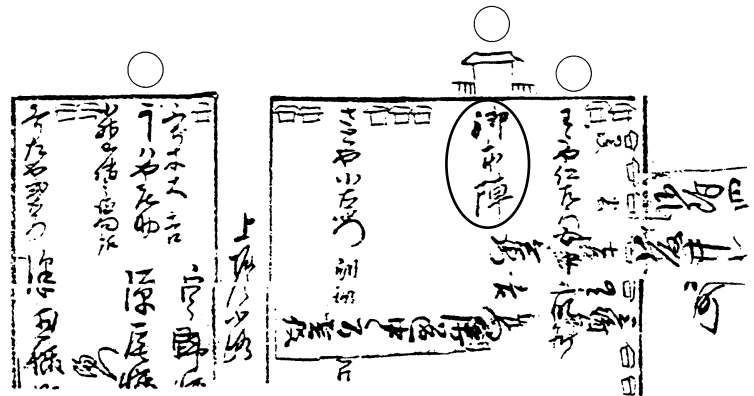


図5 小林計一郎1994に加筆

は大門町の宿で本陣を持ち回りしていた。調査地はこれら宿の裏手や隣接する敷地であり、出土遺物に見られる傾向はこの立地に由来するのであろう。

今回の調査では調査地の土地利用について、完全には解明できなかった。今後このような小路での調査事例が増加することにより、参道からでは分からない中近世の善光寺門前町が解明されることを期待したい。

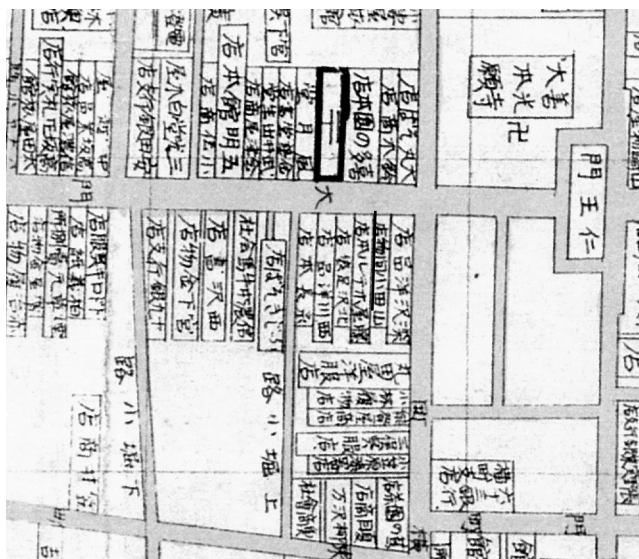


図6 大正14年4月長野市略図並商工業案内  
(元善町誌編集委員会1980)に加筆

表3 出土土器・陶磁器観察表(1)

掲載No.	出土位置	種別	器種	残存率	法量(mm)			重量(g)	色調	胎土	釉薬	文様・その他特徴	推定産地	推定年代	備考
					口径	器高	底径								
1	1面北半	土器	皿	1/4	7.7	7.1	4.2	11.00	にふい黄褐色	にふい黄褐色、母良			中世	口縁部スズ附着	
2	1面北半	陶器	碗	1/3	10.7	7.5	4.6	144.71	灰黄褐色			不明		越中瀬戸か在地	
3	1面北半	陶器	碗	1/3	11.5	7.7	4.5	103.20		黄灰、精良		不明		越中瀬戸か在地	
4	1面北半	陶器	碗	底部1/1	—	(6.3)	5.1	135.12		にふい黄褐色、緻密		肥前系	大橋Ⅲ期(1650~1690)		
5	東1面	陶器	碗	底部1/1	—	(5.8)	5.3	135.19	浅黄	灰白、空隙		瀬戸美濃系	4・5小期(17C3/4~4/4)		
6	東1面	陶器	碗	底部1/1	—	(4.0)	5.5	153.30	浅黄	灰白、空隙		瀬戸美濃系	4・5小期(17C3/4~4/4)		
7	1面北半	磁器	碗	底部1/1	10.2	7.2	3.6	97.10	灰白	灰白、精良		肥前系	大橋Ⅲ期(1650~1670)		
8	1面北半	磁器	碗	体~底部2/3	—	(4.3)	4.2	87.94	灰白	灰白、精良		肥前系	大橋Ⅲ期(1650~1670)		
9	1面北半	磁器	小広、真碗	1/2	9.0	5.9	4.4	82.15	灰白	灰白、精良		肥前系	大橋Ⅴ期(1780~1810)		
10	1面北半	磁器	湯呑	完形	6.8	5.7	3.2	123.22	灰白	灰白、精良		肥前系	大橋Ⅴ期(1820~1860)		
11	1面	陶器	皿	1/3	13.2	3.6	4.9	49.54	にふい橙	にふい橙、白色粒、小礫		越中瀬戸	17c前		
12	1面北半	陶器	皿	口縁部1/4	11.2	(2.4)	—	21.81	にふい橙	にふい橙、白色粒、小礫		越中瀬戸	17c 1/4		
13	東1面	陶器	皿	底部3/4	—	(2.0)	5.0	60.13	にふい赤褐色	にふい赤褐色、精良		肥前系	大橋Ⅱ期(1610~1650)		
14	1面	陶器	皿	口~体部1/8	14.0	(3.2)	—	26.50	灰	灰黒色粒		美濃	窯ヶ根塚相2(17c 1/4~2/4)		
15	東1面	陶器	丸皿	1/4	11.8	2.4	6.8	30.20	灰白	灰白、黒色粒、空隙		瀬戸美濃系	5小期(17c 4/4)		
16	1面	陶器	灯明受皿	1/3	6.2	2.5	3.6	26.43	浅黄褐色	浅黄褐色、小礫		美濃	10・11小期(19c 2/4~3/4)		
17	1面北半	陶器	灯明受皿	1/3	10.4	2.8	5.0	42.48	にふい黄褐色	にふい黄褐色		瀬戸美濃系	10・11小期(19c 2/4~3/4)		
18	1面	磁器	皿	1/10	30.2	6.3	20.3	125.80	灰白	灰白、精良		肥前系	大橋Ⅴ期以降(1780~)	漆継	
19	東1面	陶器	挿鉢	体下半1/4	—	(9.1)	10.4	485.67	赤灰	赤褐色、小礫		肥前系	大橋Ⅲ期(1650~1690)		
20	1面北半	陶器	挿鉢	口縁部1/10	28.8	(7.5)	—	74.60	灰褐色	黄灰白色粒、黒色粒		松代系	19c代以降		
21	1面北半	陶器	壺力	底部1/2	—	(6.3)	13.4	285.63	褐色	にふい橙、礫、粗		越中瀬戸カ	近世		
22	1面北半	白磁	鉢力	底部1/2	—	(2.6)	3.9	35.60	白	白、ガラス質		不明	19c代		
23	1面北半	陶器	火入	口~体部1/6	27.2	(7.1)	—	150.73	褐色	灰白、緻密		肥前系	大橋Ⅲ期(1650~1690)		
24	1面	磁器	壺蓋	口~体部1/12	11.7	(5.7)	—	55.63	灰白	灰白、精良		肥前系	大橋Ⅴ期(1780~1860)		
25	1面北半	青磁	瓶	底部1/1	—	(2.7)	2.2	18.44	灰白	灰白、精良		中国カ	近世		
26	1面	磁器	神酒徳利	完形	1.6	7.3	2.4	46.68	白	白、ガラス質		瀬戸美濃系	19c中~後半		
27	1面	磁器	神酒徳利	1/2	1.7	7.5	2.7	32.79	白	白、ガラス質		瀬戸美濃系	19c中~後半		
28	1面	白磁	戸重	1/2	外径5.4	1.1	孔径1.6	25.27	灰白	灰白、精良		肥前系	大橋Ⅴ期(1780~1860)		
29	石列1・2内	磁器	碗	2/3	11.6	5.5	4.0	98.36	白	白、ガラス質		瀬戸美濃系	フェーズⅣ(20c 1/4後~3/4)		
30	石列1・2内	磁器	碗	体部下半	—	(3.4)	3.5	72.96	灰白	灰白、精良		瀬戸美濃系	フェーズⅠ~Ⅳ(19C4/4前~20c 1/4前)		
31	石列4	陶器	皿	1/3	12.5	5.1	5.1	68.15	浅黄	灰白、精良		肥前系	大橋Ⅴ期(18C前~中)		
32	1号遺構	陶器	筒形湯呑	1/3	7.9	(8.2)	—	41.58	灰白	灰白、精良		肥前系	18c後		
33	1号遺構	磁器	碗	ほぼ完形	11.9	4.9	4	154.68	白	白、ガラス質		瀬戸美濃系	フェーズⅢ(19c4/4未~20c 1/4初)		
34	1号遺構	磁器	小杯	2/3	7.5	3.3	3.1	36.44	白	白、ガラス質		瀬戸美濃系	19c中~		
35	1号遺構	磁器	角皿	6/7	長13.1 短10.6	3.6	—	308.90	白	白、ガラス質		瀬戸美濃系	フェーズⅠ(19c4/4前半~明治10年代)		
36	1号遺構	陶器	挿鉢	4/5	25.8	13.7	13.2	1,667.79	にふい赤褐色	にふい黄褐色、白色粒、黒色粒、粗		私代系	19c~		
37	1号遺構	陶器	鉢	口縁部1/7	29.4	(10.0)	—	214.01	灰白	灰黄、白色粒、や粗		私代系	19c~		
38	1号遺構	青磁	花瓶	7/8	8.6	25.5	7.3	1,052.70	緑灰	灰、精良		不明	19c代		
39	1号遺構	磁器	油壺	体下半~底部	—	(4.5)	5.2	105.47	灰白	灰白、精良		肥前系	大橋Ⅲ期(1650~1690)		
40	1号遺構	土器	焜炉カ	口~胴部1/6	22	(8.1)	—	128.28	にふい橙	にふい橙、白色粒、やや粗		在地カ	近世		
41	1号遺構	瓦器	火鉢(香戸)	1/3	14.3	7.2	7.4	124.16	内橙、外にふい、橙	にふい橙、褐色粒、小礫		在地カ	中世後期		

出土土器・陶磁器観察表(2)

掲載No.	出土位置	種別	器種	残存率	法量(cm)		色調	胎土	釉薬	文様・その他特徴	推定産地	推定年代	備考	
					口径	器高								
42	1号遺構	瓦器	火鉢(香炉)	底部1/8	—	(5.5)	18.3	205.70	暗灰	にぶい橙白色粒、橙色粒小礫	外：雷文 ロクロ成形、回転糸切	在地	中世	
43	62号遺構	土器	皿	1/8	10.0	2.3	6.3	17.18	にぶい橙	にぶい橙、砂粒、精良	在地	中世		
44	62号遺構	青磁染付	碗	1/10	11	7.4	5.4	84.44	灰白、精良	鉄絵	肥前系	大橋II-2期(1630~1650)		
45	62号遺構	磁器	碗蓋	1/3	8.7	2.0	—	40.18	白	染付、人工コマルト	瀬戸美濃系	フェーズI~IV(19c4/4前~20c1/4前)		
46	62号遺構	磁器	皿	3/4	18.4	2.9	11.2	206.12	灰白、精良	染付、呉須、鉄軸	肥前系	大橋IV期前半(17c末~18c前)		
47	62号遺構	陶器	捏鉢	口縁1/12	22.9	(5.0)	—	54.03	灰白	白色釉、銅緑釉	私代系	19c~		
48	65号遺構	磁器	鉢	底部1/6	15.0	3.6	9.1	34.69	灰白、精良	染付、呉須	肥前系	大橋V期(1780~1860)		被熱はげしい
49	65号遺構	磁器	鉢	底部1/4	—	(6.3)	17.2	416.51	灰白	不明	私代系カ	19c~		被熱による付着物
50	65号遺構	磁器	火入	口縁1/4	10.6	(5.5)	—	91.12	灰白、精良	染付、呉須	肥前系	大橋IV・V期(18c後~19c中葉)		
51	65号遺構	土器	ミニチュア	完形	2.3	1.3	1.0	2.74	にぶい橙	透明釉、白色釉	不明	18c後~		
52	遺物集中	陶器	碗	体下半	—	(5.5)	4.2	142.36	灰白、精良	透明釉	肥前系	大橋III・IV期(1650~1780)		
53	遺物集中	陶器	腰折碗	底部1/1	—	(2.9)	4.0	31.00	明オリーブ灰	灰軸	美濃	大橋III(1740~1770)		上手向日向窓
54	遺物集中	陶器	碗	体下半	—	(5.3)	4.6	136.04	黒	鉄軸	美濃	波房III(18c1/4~2/4)		窯々根窯跡相6
55	遺物集中	陶器	碗	1/2	11.3	7.1	4.7	180.06	灰白	染付、呉須、白化粧	肥前系	波佐見V-3(1780~1810)		血山本登窯
56	遺物集中	陶器	碗	2/3	10.8	6.6	4.3	211.43	灰白	染付、呉須、白化粧	肥前系	波佐見V-3(1780~1810)		血山本登窯
57	遺物集中	陶器	碗	3/4	11.8	8.1	5.0	367.29	灰	鉄絵、白化粧、透明釉	肥前系	波佐見V-3(1780~1810)		血山本登窯
58	遺物集中	陶器	碗	3/4	11.4	7.1	4.7	348.37	灰	呉須、白化粧、透明釉	肥前系	波佐見V-3(1780~1810)		血山本登窯
59	東2面	土器	皿	1/4	11.8	3.1	7.5	48.02	にぶい、黄橙	にぶい、黄橙、白色粒、橙色粒小礫	在地	中世		口縁内面スス付着
60	2面	磁器	猪口	底部1/1	—	—	—	19.98	灰白	灰白、精良	肥前系	大橋V期(1780~1860)		高台内「するがや」朱書
61	東2面	陶器	溝縁皿	底部1/1	—	(2.1)	下4.2	92.53	オリーブ灰	上灰黄褐、下にぶい、黄橙、緻密	肥前系	波佐見II(1620~1630)		皿2枚磁着状態で使用
62	東2面	陶器	溝縁皿	2/3	11.2	2.1	3.8	75.24	オリーブ灰	にぶい、黄橙、緻密	肥前系	波佐見II(1620~1630)		
63	東2面	白磁	不明	1/3	9.5	1.4	4.6	28.64	白	にぶい、黄橙、緻密	瀬戸美濃系	19c~		
64	2・3面	土器	皿	1/4	8.0	2.2	4.2	13.78	橙	橙、砂粒、精良	在地	中世		
65	2・3面	土器	皿	1/4	9.2	1.9	4.9	13.69	にぶい、赤褐	にぶい、赤褐、白色粒、小礫	在地	中世		
66	2・3面	陶器	碗	底部	—	(4.4)	4.9	115.37	橙、黒褐	橙	肥前系	大橋IV期(1690~1780)		
67	2・3面	陶器	溝縁皿	口縁部1/8	12.7	(1.7)	—	8.19	にぶい、褐、灰白	にぶい、褐	肥前系	大橋II期(1610~1650)		
68	2・3面	磁器	紅皿	完形	5.8	1.3	2.3	62.14	灰白	灰白、精良	肥前系	大橋V期(1850~)		
69	3面	土器	皿	1/4	10.0	2.7	5.8	36.60	にぶい、橙	にぶい、橙、白色粒、橙色粒	在地	中世		
70	東3面	土器	皿	1/4	7.2	3.3	5.7	34.80	にぶい、黄褐	にぶい、黄橙、白色粒、赤色粒、角閃石	在地	中世		
71	3面	陶器	碗	底部	—	(4.4)	4.6	95.96	黒、灰白	灰白、緻密	肥前系	大橋II期(1610~1650)		内面口形筋遺痕
72	3面	陶器	碗	底部	—	(4.4)	5.0	100.97	緑灰	銅緑釉	肥前系	大橋II期(1610~1650)		
73	3面	陶器	碗	底部	—	(3.2)	4.8	78.50	浅黄	灰白、緻密	肥前系	大橋III期(1650~1690)		
74	3面	陶器	碗	底部	—	(4.0)	4.6	68.94	浅黄	灰白、緻密	肥前系	大橋V期(1690~1780)		
75	3面	磁器	丸碗	3/4	8.1	4.8	3.3	90.32	灰白	菊花文、見込彫れた五弁花文	肥前系	大橋V期(1780~1810)		
76	3面	白磁	小杯	2/3	6.8	4.5	3.4	57.80	灰白	染付、鉄軸、砂付着	肥前系	大橋II期(1650~1690)		
77	3面	陶器	折縁皿	1/5	11.9	2.5	7.6	19.87	淡黄	灰白	美濃	大窯4段階(1590~1610)		被熱痕



出土土器・陶磁器類表(3)

掲載No.	出土位置	種別	器種	残存率	法量(cm)		重量(g)	色調	胎土	釉薬	文様・その他特徴	推定産地	推定年代	備考
					口径	底径								
78	3面	陶器	皿	口縁1/4	31.6	(4.3)	59.32		にぶい黄橙堅緻	銅緑釉・鉄釉・白化粧	体部銅釉・白化粧・口縁部銅緑釉	肥前系	大橋Ⅲ期(1650~1690)	
79	3面	陶器	皿	底部1/2	—	(5.2)	197.41		灰褐堅緻	白泥・銅緑釉・白色釉	外面露胎	肥前系	大橋Ⅱ期(1610~1650)	被熱痕
80	3面	陶器	皿	1/3	13.8	3.2	107.75	にぶい橙	にぶい橙・小礫・やや粗	鉄釉	体下半・見込露胎	越中瀬戸	17c1/4	被熱痕
81	3面	陶器	皿	1/3	10.7	3.3	48.47	にぶい黄橙	にぶい黄橙・白色粒・黒色粒・やや粗	鉄釉	体下半・見込露胎	越中瀬戸	17c1/4	
82	3面	白磁	皿	1/3	14.3	2.8	81.47	灰白	灰白・精良	透明釉・鉄釉	内面陽刻唐草文・量付露胎・口紅	肥前系	大橋Ⅱ・Ⅰ~Ⅲ期(1610~1690)	
83	3面	陶器	鉢	口縁部1/9	16.4	(2.7)	12.80	淡黄	灰白・精良	鉄釉	内外口縁付近露胎	瀬戸	大橋Ⅱ期中Ⅳ期(14c中葉)	
84	7号遺構	陶器	碗	1/2	11.7	6.9	4.6	黒褐	黄灰・白色粒・砂粒	鉄釉	兎中・体下部露胎	肥前系	大橋Ⅱ期(1610~1650)	越中瀬戸の可能性
85	8号遺構	陶器	碗	1/3	11.4	7.6	4.5	黒褐	にぶい黄橙堅緻	鉄釉	兎中・体下部露胎	肥前系	大橋Ⅱ期(1610~1650)	
86	25号遺構	土器	皿	底部	—	(1.1)	17.29	にぶい橙	にぶい黄橙・褐色粒・雲母・角閃石		ロクロ成形・回転糸切	在地	中世	
87	30号遺構	土器	皿	1/6	8.6	1.9	11.31	にぶい橙	にぶい黄橙・精良		手づくね成形・口縁部横ナデ	在地	中世	
88	31号遺構	土器	皿	1/4	9.4	2.5	18.81	にぶい黄橙	にぶい黄橙・褐色粒・雲母		ロクロ成形・回転糸切	在地	中世	
89	31号遺構	瓦器	不明		長(6.0)	(3.6)	17.87	内外黒	灰黄褐・白色粒・小礫・やや粗		仕切り・脚貼付	在地カ	中近世	
90	32号遺構	陶器	皿	底部1/4	—	(5.5)	348.95	にぶい橙	にぶい黄橙堅緻	鉄釉・白泥	砂目・体下半露胎・ロクロ削り・高台内指圧・量付糸切	肥前系	大橋Ⅰ・Ⅱ期(1580~1650)	
91	39号遺構西	土器	皿	口~体部1/6	7.7	1.9	6.48	にぶい黄橙	灰黄・白色粒・やや粗		ロクロ成形	在地	15c代	
92	39号遺構西	土器	皿	2/3	11.9	3.5	155.27	にぶい黄橙	にぶい黄橙・褐色粒・雲母・礫		ロクロ成形・回転糸切	在地	15c代	口縁外面スス付着
93	39号遺構西	土器	皿	1/8	11.3	2.2	12.76	浅黄	浅黄・砂粒		ロクロ成形・回転糸切・口縁部横ナデ	在地	15c代	
94	39号遺構西	土器	皿	底部1/3	—	(3.1)	58.74	にぶい黄橙	にぶい黄橙・褐色粒・雲母		ロクロ成形・回転糸切	在地	15c代	
95	39号遺構東	青磁	碗	底部1/4	—	(3.0)	43.27	明緑灰	灰白・精良		砂目・量付露胎	肥前系	大橋Ⅱ・Ⅰ・2期(1610~1650)	
96	39号遺構西	青磁	碗	底部1/2	—	(3.2)	4.7	49.04	明オリーブ灰	灰白・精良	高台露胎	肥前系	大橋Ⅱ・2期(1630~1650)	
97	39号遺構東	陶器	挿鉢	底部1/10	—	(5.2)	11.4	252.31	にぶい橙・白色粒		ロクロ成形・回転糸切・掘目1単位・10本	肥前系	大橋Ⅱ・Ⅲ期(1610~1690)	黒色付着物
98	39号遺構西	陶器	不明	底部片	長(7.7)	(2.2)	68.41	灰	灰・白色粒・小礫・やや粗		不明	不明		内面にスス・糸付着
99	40号遺構東	土器	皿	口縁部1/2	8.6	(2.2)	4.56	にぶい橙	にぶい黄橙・精良		ロクロ成形	在地	15c代	内面にスス付着
100	40号遺構西	土器	皿	1/8	5.4	2.1	3.5	5.85	にぶい黄橙		ロクロ成形	在地	15c代	
101	40号遺構西	土器	皿	完形	6.3	1.9	3.5	25.60	にぶい橙	にぶい黄橙・精良	ロクロ成形・回転糸切	在地	15c代	口縁にスス付着
102	40号遺構西	土器	皿	完形	6.2	2.1	25.17	にぶい橙	にぶい黄橙・精良		ロクロ成形・回転糸切	在地	15c代	口縁にスス付着
103	40号遺構西	土器	皿	3/4	6.9	1.9	32.75	浅黄橙	浅黄橙・褐色粒・雲母		ロクロ成形・回転糸切	在地	15c代	
104	40号遺構西	土器	皿	底部1/3	9.6	2.2	28.67	浅黄橙	浅黄橙・褐色粒・雲母		ロクロ成形・回転糸切	在地	15c代	
105	40号遺構東	土器	皿	1/4	12.4	3.4	70.44	にぶい黄橙	にぶい黄橙・褐色粒・雲母		ロクロ成形・回転糸切	在地	15c代	
106	40号遺構西	土器	皿	1/10	12.2	3.3	34.20	にぶい橙	にぶい黄橙・褐色粒・雲母		ロクロ成形・回転糸切・体下部横ナデ	在地	15c代	
107	40号遺構西	土器	皿	口縁部1/6	—	(1.8)	40.47	にぶい橙	にぶい黄橙・褐色粒・雲母		ロクロ成形・回転糸切	在地	15c代	
108	40号遺構東	陶器	天目碗	1/6	12.0	(5.4)	41.57	黒	灰白・精良	鉄釉	体下半露胎	瀬戸美濃系	古瀬戸後期(15c代)	
109	40号遺構西	白磁	皿	口~底部1/3	12.2	3.0	5.2	56.60	灰白		見込印・支・高台無釉	中国	15c代	高台内墨書「十」
110	41号遺構西	土器	皿	底部1/4	—	(2.4)	6.9	58.24	にぶい黄橙	灰白・精良	ロクロ成形・回転糸切	在地	15c代	
111	41号遺構西	土器	皿	底部1/4	—	(2.0)	6.4	38.83	にぶい黄橙	にぶい黄橙・雲母	ロクロ成形・回転糸切	在地	15c代	
112	41号遺構東	土器	皿	ほぼ完形	9.0	2.4	88.28	灰黄	灰黄・雲母		ロクロ成形・回転糸切・口縁部横ナデ	在地	15c代	口縁・底部外面にスス付着
113	41号遺構東	土器	皿	ほぼ完形	7.8	1.8	6.0	56.51	にぶい黄橙	にぶい黄橙・雲母	ロクロ成形・回転糸切	在地	15c代	口縁にスス付着
114	41号遺構西	土器	皿	1/6	8.5	2.6	5.4	16.12	灰黄	灰黄・精良	ロクロ成形・回転糸切	在地	15c代	破損後スス付着
115	41号遺構西	陶器	碗	2/3	11.5	7.9	5.0	173.30	灰白堅緻	灰釉	饅頭心・量付露胎	肥前系	大橋Ⅲ期(1650~1690)	
116	41号遺構西	陶器	皿	1/3	34.8	10.1	10.6	427.16	明赤褐	白化粧・銅緑釉	体下半露胎・露胎	肥前系	大橋Ⅲ期(1650~1690)	
117	41号遺構西	陶器	皿	底部ほぼ完	13.9	3.5	5.9	107.58	橙	銅釉	見込・体下半露胎・兎中	肥前系	大橋Ⅱ期(1610~1650)	
118	41号遺構西	磁器	皿	1/12	15.7	3.9	6.4	26.28	灰白	灰白・精良	砂目・量付露胎	肥前系	大橋Ⅱ期(1610~1650)	
119	41号遺構西	陶器	火入	口縁1/12	23.0	(4.0)	34.49	明緑灰	褐灰・堅緻	銅緑釉・鉄釉・白化粧	刷毛目・文・内面露胎	肥前系	大橋Ⅲ期(1650~1690)	

出土土器・陶磁器観察表(4)

掲載No.	出土位置	種別	器種	残存率	法量(cm)		重量(g)	色調	胎土	釉薬	文様・その他特徴	推定産地	推定年代	備考
					口径	器高								
120	41号遺構西	陶器	火入	口縁1/6	13.7 (2.7)	—	灰白	明赤褐,精良	白化粧,鉄釉	内面露胎	肥前系	大橋Ⅲ期(1650~1690)		
121	41号遺構東	瓦器	火鉢	口縁1/12	26.0 (5.0)	—	灰黄	灰黄褐,白色粒,黑色粒,雲母			在地	中世後期		
122	41号遺構西	土器	内耳鍋	口縁1/2	24.8 (4.4)	—	黒	灰,砂粒			在地	15c代	内外スス付着	
123	41号遺構西	土器	内耳鍋	底部1/6	30.0 (7.1)	28.3	明褐色	明褐色,砂粒,角閃石			在地	近世		
124	41号遺構東	土器	内耳鍋	口縁1/10	36.0 (8.1)	—	内,褐灰,外,黒	褐灰,赤色粒,白色粒,雲母			在地	15c代		
125	52号遺構	土器	皿	底部1/6	7.0 (2.1)	4.7	橙	橙,白色粒,雲母			在地	15c代		
126	52号遺構	土器	皿	底部1/6	10.3 (2.6)	—	橙	橙,精良			在地	15c代		
127	52号遺構	磁器	碗	2/3	10.8 (7.0)	4.1	灰白	灰白,精良	染付,呉須	量付露胎,軸生掛	肥前系	大橋Ⅱ-1期(1610~1630)		
128	52号遺構	陶器	皿	高台1/4	— (1.8)	7.5	灰灰	黄灰,緻密	灰釉,鉄釉	砂目積	肥前系	大橋Ⅲ期(1650~1690)		
129	52号遺構	磁器	皿	高台1/12	— (2.5)	6.4	灰白	灰白,精良	染付,呉須	砂目積,蛇の目,軸生掛	肥前系	大橋Ⅱ-1期(1610~1630)		
130	52号遺構	陶器	挿鉢	1/2	33.8 (13.6)	13.0	橙	橙,小礫	口縁部鉄釉	ロクロ成形,回転糸切,単位12本	肥前系	大橋Ⅱ期(1620~1650)		
131	52号遺構	土器	蓋	1/4	7.6 (7.8)	10.3	内,黒褐,外,褐灰	褐灰,白色粒			在地カ	近世	内面スス付着	
132	52号遺構	土器	蓋	口~体部1/4	10.2 (6.5)	—	内,黒褐,外,褐灰	褐灰,白色粒			在地カ	近世	内面黒化,線状痕	
133	54号遺構	陶器	天目碗	口縁1/6	13.1 (4.3)	—	黒褐	灰白,精良	銅釉,鉄釉	輪襷,ロクロナデ	美濃	大鷲4段階~連房Ⅰ(1590~1630)		
134	2・3面北トレンチ	磁器	丸碗	2/3	8.8 (4.9)	3.4	灰白	灰白,精良	染付,呉須	矢羽文,量付露胎	肥前系	大橋Ⅴ期(1780~1810)		
135	2・3面北トレンチ	磁器	皿	1/5	9.8 (3.1)	3.7	灰白	灰白,精良	透明釉	見込蛇の目,軸生掛,体下半露胎	肥前系	大橋Ⅲ~Ⅳ期(1650~1780)		
136	2・3面東トレンチ	土器	皿	底部1/1	— (1.7)	4.7	橙	橙,白色粒			在地	不明		
137	2・3面南西トレンチ	陶器	碗	底部	— (3.1)	4.2	黒褐	黄灰	鉄釉	体下半露胎,胎中少	肥前系	大橋Ⅱ期(1610~1650)		
138	3面トレンチ	土器	皿	1/4	10.8 (3.0)	5.4	浅黄橙	浅黄橙,赤色粒,雲母			在地	15c代		
139	3面トレンチ	土器カ	鉢カ	口~体部1/8	22.1 (12.4)	—	灰黄褐	灰白,橙,赤色粒,雲母			不明	不明		
140	南トレンチ	土器	鉢	口縁部1/8	24.6 (7.4)	—	に,ぶい,橙	に,ぶい,橙,白色粒,雲母			在地カ	近世カ	外面スス付着	
141	トレンチ	陶器	不明	小片	—	—	に,ぶい,橙	灰白,精良	上絵	外面漢詩文「口領」流人「開説梅」	不明	近世以降	孟浩然の詩	
142	廃土	青磁	碗	底部	長7.5	短7.2	明オリーブ灰	灰白,精良		見込み印花文,高台内露胎	龍泉窯系	15c代		
143	攪乱	磁器	碗	7/8	10.8 (6.2)	3.7	白	白,ガラス質	染付,人工コハバルト	量付露胎,型紙摺	瀬戸美濃系カ	フェースⅡ~Ⅲ(19c/4/4後~20c1/4初)		
144	廃土	磁器	筒形湯呑	2/3	5.0 (5.6)	2.9	白	白,ガラス質	染付,人工コハバルト	量付露胎,型紙摺	瀬戸美濃系カ	フェースⅡ~Ⅲ(19c/4/4後~20c1/4初)	池子遺跡群に同一品あり	
145	廃土	磁器	酒盃	ほぼ完形	5.1 (3.0)	1.9	白	白,ガラス質	染付,人工コハバルト	唐草文型紙摺カ	瀬戸美濃系カ	近代		
146	廃土	磁器	多角皿	1/4	11.3 (2.8)	4.6	白	白,ガラス質	染付,人工コハバルト	量付露胎,見込に能「高砂」の歌詞	瀬戸美濃系カ	近代		
147	廃土	磁器	鉢	口縁部1/6	17.2 (4.2)	—	灰白	灰白,精良	染付,呉須,金彩	口唇刻み,上絵,区画文様	肥前系	大橋Ⅴ期(1780~1860)	被熱	
148	攪乱	陶器	水注	1/2	3.5 (8.1)	6.0	黄褐	浅黄橙,精良	鉄釉	方形,型押成形,体下部沈線之条,内面・外底部露胎	不明	近代		
149	試掘	陶器	水甕	口縁1/10	2.7 (7.8)	—	緑色	灰白,小礫	灰釉,緑釉	外面雷文・花文	瀬戸美濃系	8小期(18c後)		

表4 石製品観察表

石臼(A:外径,B:器高,C:中心高),石塔(A:ヨコ,B:タテ,C:ヨコ),金属製品(A:長さ,B:幅,C:厚さ)

掲載No.	出土位置	分類	石材	法量(cm)			重量(Kg)	残存率	備考
				A	B	C			
164	石列1・2	粉挽臼	安山岩	37.2	12.2	5.2	13.30	1/2	上臼,6分画,左回し,側方打込み挽手穴,中央穴未貫通
165	石列1・2	粉挽臼	安山岩	34.5	13.4	6.7	15.40	1/2強	上臼,左回し,側方打込み挽手穴,中央穴未貫通,磨減激しい
166	41号遺構東半	粉挽臼	安山岩	32.4	10.6	5.8	7.25	1/2	下臼,6分画,左回し
167	2・3次面南トレンチ	粉挽臼	安山岩	30.0	8.8	1.9	3.75	1/3	上臼,6分画,左回し,側方打込み挽手穴,中央穴未貫通
168	52号遺構	砥石	頁岩	5.9	(9.7)	19.7	263.15g	不明	縦方向線状痕多,剥離片東3次面検出と接合
169	3次面トレンチ	砥石	頁岩	6.1	1.6	(9.3)	140.45g	不明	
170	52号遺構	軽石	軽石	4.5	2.0	(4.0)	14.43g	不明	浅間山溶岩カ
171	石列1・2	宝篋印塔	安山岩	15.0	13.6	15.5	5.40	4/5	塔身,4面に梵字「金剛界四方仏」
172	南端石列	宝篋印塔	安山岩	15.3	12.0	15.0	5.35	ほぼ完形	塔身,4面に梵字「バン(大日如来)」
—	石列1・2	五輪塔	安山岩	25.6	15.0	25.0	12.80	1/1	火輪
—	石列1・2	五輪塔	安山岩	21.7	13.0	22.0	7.85	ほぼ完形	火輪
—	41号遺構東半	五輪塔	安山岩	15.6	19.5	13.1	5.10	1/1	空風輪
—	41号遺構東半	五輪塔	安山岩	24.7	16.2	24.4	10.40	4/5	火輪,一部被熱
—	41号遺構東半	五輪塔	安山岩	15.1	17.6	(11.9)	2.05	3/4	空風輪,風輪に凹有
—	41号遺構東半	粉挽臼	安山岩	(13.4)	9.5	6.5	2.60	1/4	上臼,6分画,左回し,側方打込み挽手穴,中央穴未貫通
—	41号遺構東半	五輪塔	安山岩	(9.8)	(12.4)	10.4	1.25	4/5	空風輪,風輪に凹み
—	南端石列	五輪塔	安山岩	径21.6	15.1	—	7.10	ほぼ完形	水輪,上部中央に凹み
—	2・3次面南トレンチ	五輪塔	安山岩	19.5	10.5	19.7	5.90	ほぼ完形	火輪,一部被熱
—	2・3次面南トレンチ	石塔カ	安山岩	21.0	(15.7)	14.5	8.25	不明	小片のため分類不明
—	2・3次面南トレンチ	五輪塔	安山岩	径19.4	13.3	—	7.10	ほぼ完形	水輪,上部中央に浅い凹み
—	トレンチ	五輪塔	安山岩	径13.2	12.6	—	2.57	4/5	空風輪,風輪に浅い凹み
—	東2次面	五輪塔	安山岩	23.5	14.2	22.8	8.65	7/8	火輪
—	東2次面	五輪塔	安山岩	22.2	12.9	21.5	8.05	ほぼ完形	火輪,頭頂部に小穴有
—	東3次面	五輪塔	安山岩	20.8	15.1	20.0	11.50	ほぼ完形	地輪,上面中央に浅い凹み

表5 金属製品観察表(1)

A長さ・外径,B幅・内径,C厚さ

掲載No.	出土位置	分類	材質	法量(mm)			重量(g)	残存率	備考	撮影No.
				A	B	C				
	62号遺構	釘カ	鉄	(29.1)	5.1	4.3	2.03			1
	62号遺構	釘	鉄	(35.5)	5.5	5.5	2.32			2
	1号遺構	銭貨		28.3	6.2~10.3	1.3	4.96	完形	新寛永通寶,4文銭,1768年~	6
	1号遺構	銭貨		22.9	5.9	1.3	2.76	完形	新寛永通寶,1文銭,1668年~	7
	1号遺構	不明	鉄	172	2.2~5.3	1.4~5.6	25.55	完形		9
173	1号遺構	不明	鉄	125	5.3~7.0	5.5~11.2	18.30	完形	片端環状	10
	1号遺構	折釘	鉄	85.5	7.7~15.3	12.9~16.9	27.13			11
174	1号遺構	不明	鉄	61.9	6.3~10.9	5.8~7.8	15.18		片端環状	12
	1号遺構	銭貨		21.7	6.1	1.2	2.38	完形	新寛永通寶,1文銭,1668年~	13
	1号遺構	銭貨		23.6	5.7	1.7	1.66	1/2	新寛永通寶カ,1文銭,1668年~	14
175	4号遺構	折釘	鉄	35.9	3.0~11.1	2.0~8.7	4.17			15
176	32号遺構	折釘	鉄	101.3	13.8	12.9	25.31			16
177	33号遺構	不明	鉄	105.4	5.3~13.6	5.3~20.9	6.57			17
	41号遺構	不明		91	16.8	7.4	22.15		中央孔あり	18
	41号遺構	銭貨		24.5	5.5	1.4	3.51	完形	古寛永通寶,1文銭,1636~1656年	19
	41号遺構	銭貨		2.45	6.8	1.2	2.58	完形	熙寧元寶,真書,北宋1068年	20
178	41号遺構	銚金具カ		64.1	33.6	2.1	6.57		3か所留め具,孔の数からは本来4カ所で固定	21
	52号遺構	不明	鉄	(58.6)	12.4	6.1	9.15		撥状	22
	52号遺構	銭貨		23.3	6.5	1.2	2.47	完形	新寛永通寶,1文銭,1668年~	23
	60号遺構	不明	鉄	109	3.4~7.4	2.5~8.2	12.40			25
	1次面	銭貨		24.8	6.5	1.2	1.52	完形	開元通寶,唐621年~	26
	1次面	銭貨		24.5	5.8	1.5	3.20	完形	元祐通寶,行書,北宋1068年~	27
179	1次面	不明	銅	11	6.6	0.7	0.56		腕状,鋳頭部カ	28
	1次面	不明	鉄	143	4.2~10.4	6.1~9.3	49.35		環状	30
	2次面	不明	鉄	68.1	2.7~7.3	3.7~9.5	4.14			32
	2次面北半	釘	鉄	58.6	3.3~5.8	2.6~5.8	5.28			33
180	3次面	煙管	銅	74.2	8.7	3.6	8.89	完形	吸口,18c後半以降	35
	3次面	銭貨		23.6	7.2	1.1	2.42	完形	開元通寶,唐621年~	36
	3次面	銭貨		22.2	6.9	1.0	2.14	完形	寛永通寶,1文銭	37
	3次面	銭貨		24.8	7.1	1.3	3.92	完形	至和通寶,真書,北宋1054年~	39
	南西トレンチ2面下層	不明	鉄	(85.5)	8.9	6.2	11.32			41
	北トレンチ2面下層	不明	鉄	(150)	13.7	2	17.56			42
	木杭列	銭貨		28.3	6	1.5	4.62	完形	新寛永通寶,4文銭,背11波,1768年~	43
	木杭列	銭貨		23.7	6.1	1.3	2.98	完形	新寛永通寶,1文銭,1668年~	44
	木杭列	銭貨		25.3	5.2	2.4	3.13	完形	新寛永通寶,1文銭,1668年~	45
	木杭列	銭貨		24.7	6.9	1.1	1.46	完形	新寛永通寶,1文銭,1668年~	46
	3次面トレンチ	銭貨		22.5	7.1	1.0	1.53	完形	新寛永通寶,1文銭,1668年~	47
	東1次面	不明	銅	43.2	1.7~3.7	1.1~4.4	1.92		中央付近3条の沈線カ	52

金属製品観察表 (2)

A 長さ・外径, B 幅・内径, C 厚さ

掲載No.	出土位置	分類	材質	法量 (mm)			重量(g)	残存率	備考	撮影No.
				A	B	C				
	東1次面	銭貨		25.5	6.7	1.2	3.58	完形	天禧通寶,北宋1017年~	54
	東1次面	銭貨		25.7	4.9	2.2	4.11	完形	古寛永通寶,1文銭,1636~1656年	55
	東1次面	銭貨		25.5	3.6	2.9	3.50	完形	古寛永通寶,1文銭,1636~1656年	57
	攪乱	釘カ	鉄	38.2	7.3~10.4	5.5~9.4	4.29			59
	廃土	銭貨		28.2	6.2	1.4	5.10	完形	新寛永通寶,4文銭,背11波,1768年~	60
	廃土	銭貨		24	6.5	1.3	2.73	完形	新寛永通寶,1文銭,1668年~	61
	試掘	銭貨		28	7.1	1.3	4.10	完形	新寛永通寶,4文銭,背11波,1768年~	63

表 6 瓦・土製品・ガラス観察表

掲載No.	出土位置	種別	器種	残存率	法量(cm)			重量(g)	色調	胎土	備考
					長さ	幅	厚さ				
150	32号遺構	古代瓦	平瓦	小片	10.0	12.5	2.3	401.72	褐灰	小礫,赤色粒,砂粒	凸面縄目叩き,凹面布目痕,端部面取
151	52号遺構	古代瓦	平瓦	小片	8.8	8.0	1.9	176.27	橙	長石,赤色粒	凸面縄目叩き,凹面布目痕,端部面取
152	1号遺構	近世瓦	軒平瓦	瓦当片	10.0	12.5	2.3	167.37	暗灰	灰,赤色粒,白色粒,小礫	瓦当貼付,均整唐草文,燻瓦
153	52号遺構	瓦	砥石	小片	5.8	3.0	1.7	55.60	黄灰	黄灰,黒色粒	転用砥石
154	南トレンチ	土製品	羽口		9.4	径8.1	孔径2.7~3.4	379.70	にぶい黄褐	にぶい黄橙,白色粒,礫粗	外面縦方向ナデ,口被熱により黒色化・鉄滓付着
155	41号遺構	磁器	玩具	完形	2.0	1.9	0.65	3.34	灰白	灰白,精良	染付,呉須,外周打ち欠き転用
156	3次面	土器	玩具	完形	3.5	3.0	0.75	9.49	灰褐	にぶい橙,砂粒	外周を打ち欠き転用
157	41号遺構	珠洲焼	不明	完形	4.6	4.2	1.5	35.02	灰	灰,白色針状物質	外面平行叩き,外周打ち欠き転用
158	39号遺構	瓦	不明	完形	5.8	5.4	2.0	68.52	暗灰	灰,礫粗	外周打ち欠き転用
159	石列1・2	土製品	基石	完形	—	径2.65	0.65	2.33	灰黄		
160	攪乱	貝製品	基石	完形	—	径2.15	05	3.16	灰白		
161	1次面	ガラス製品	おはじき	完形	—	径1.65	0.5	2.03	淡緑		透明,気泡伸長
162	2・3北トレンチ	ガラス製品	おはじき	完形	—	径1.4	0.2~0.35	1.11	青紫		上面中央円形窪み,透明,気泡極小
163	攪乱	ガラス製品	瓶	完形	口径2.1	器高7.4	底径2.8	39.48	透明		型使用,側面に合わせ目あり,気泡,底面偏肉

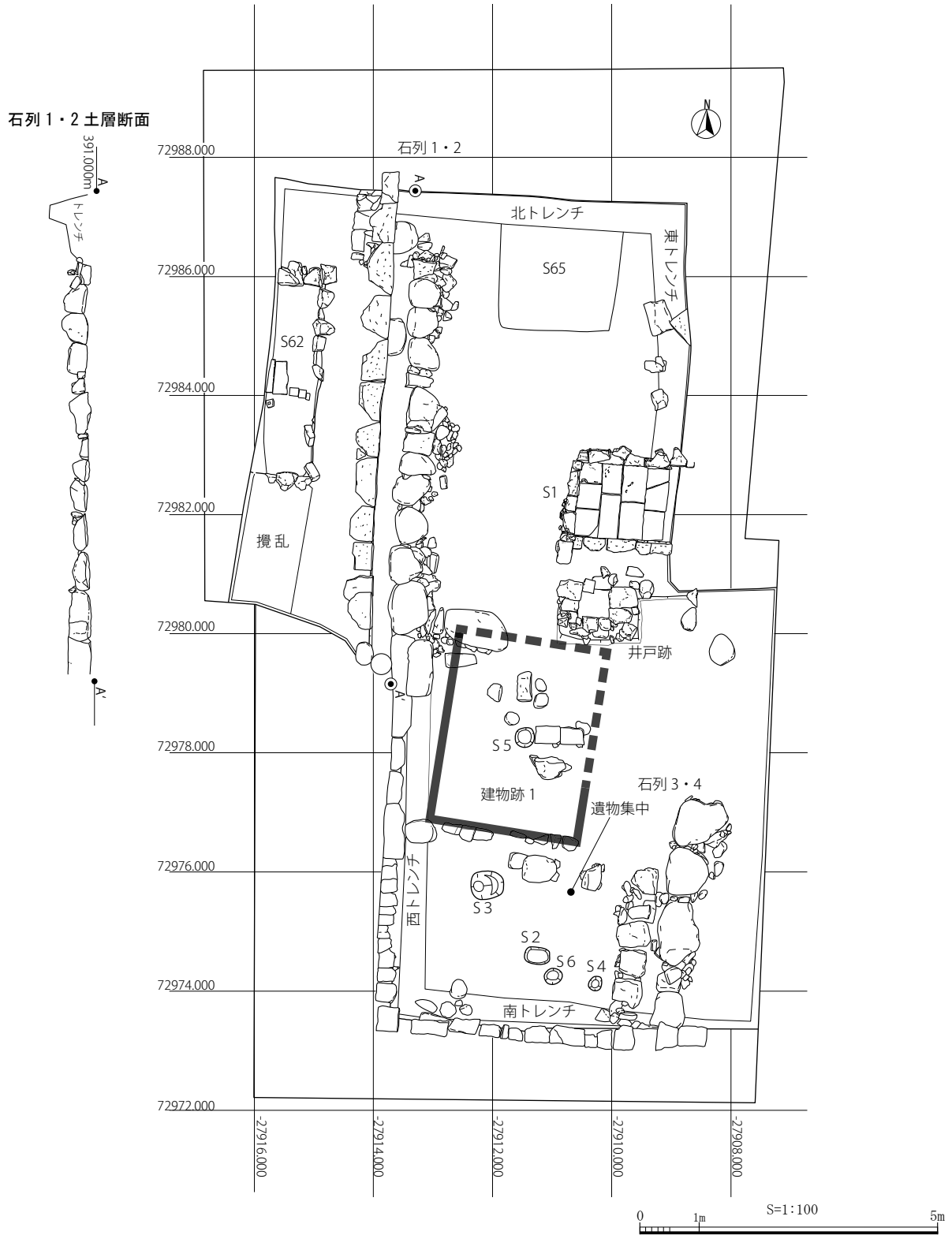
表 7 掲載外土器・陶磁器観察表

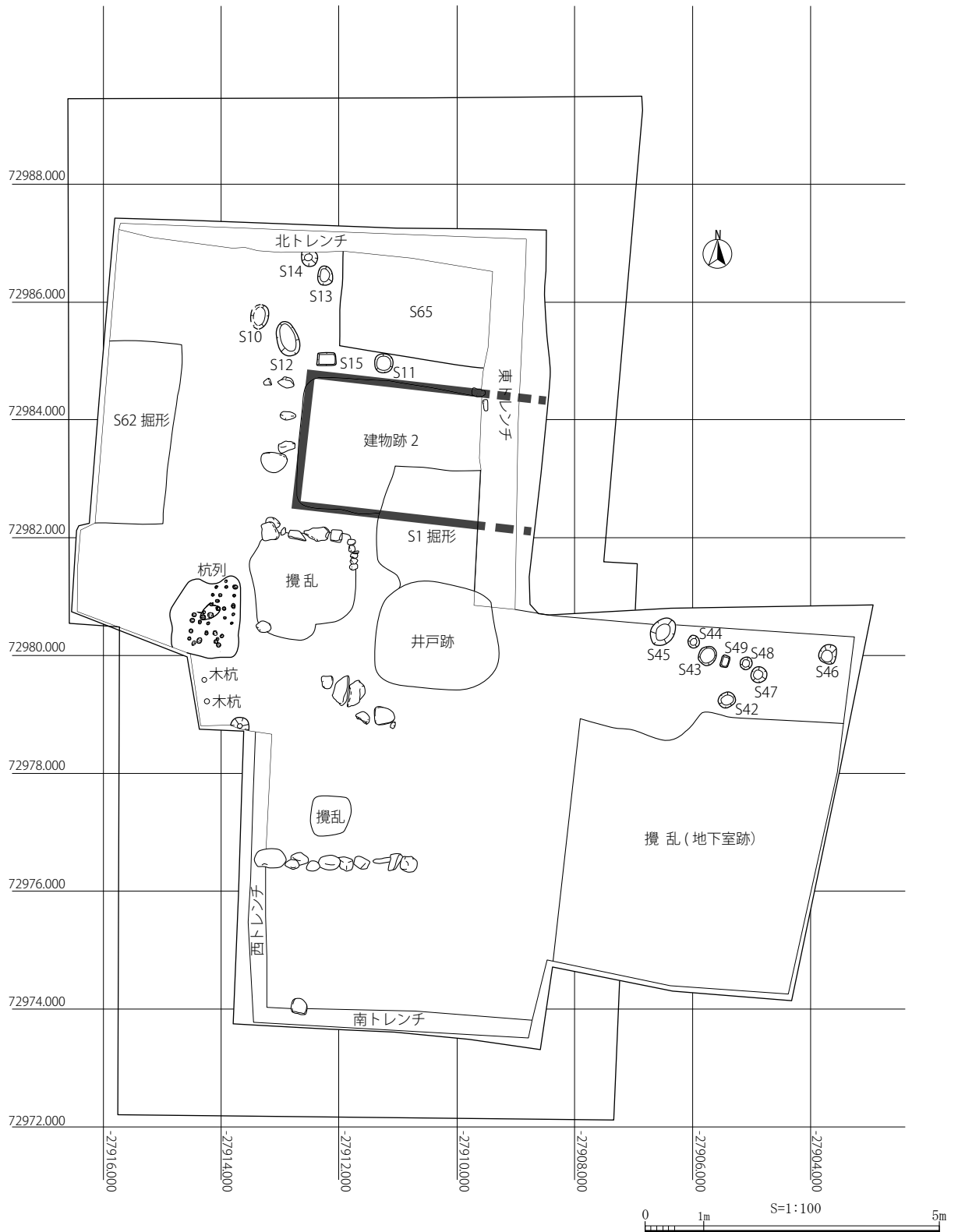
出土位置	種別	推定産地	器種・点数
1次面	土器	在地	皿6,内耳鍋5,火鉢1,不明8
	陶器	肥前系	碗18,皿5,蓋1,搦鉢4,袋物1
		瀬戸美濃系	碗29,皿1,搦鉢3,鉢1,袋物4,不明2
		不明	搦鉢1,急須4,不明1
		越中瀬戸焼	皿2
	磁器	肥前系	碗59,小杯3,皿10,鉢2,蓋2,袋物9,不明4
		瀬戸美濃系	碗8,皿1,蓋物2,香炉1
		不明	急須3,不明2
	青磁	不明	碗2,鉢2,香炉1
	瓦	在地	古代瓦1
2次面	土器	在地	皿41,内耳鍋3,鉢6,不明1
	陶器	肥前系	碗3,鉢1
		瀬戸美濃系	碗6,皿2,鉢1
		不明	不明1,袋物2
	磁器	肥前系	碗8,小杯1,紅皿1,鉢2,袋物1,青磁香炉1
		瀬戸美濃系	碗9,皿1,鉢2,袋物1,不明2
	瓦器	不明	火鉢1
青磁	不明	瓶1	
2・3次面	土器	在地	皿2,内耳鍋1

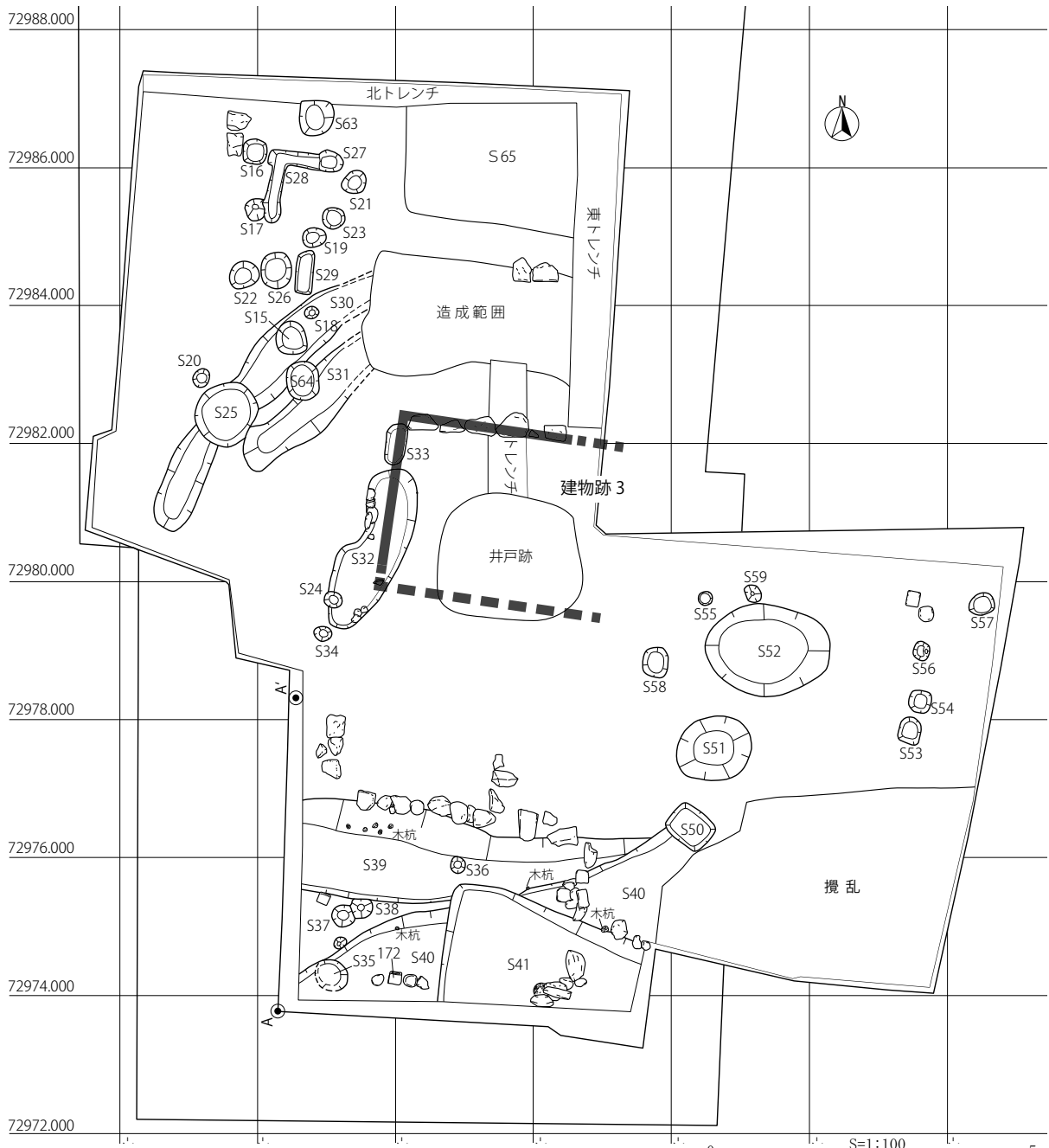
出土位置	種別	推定産地	器種・点数
2・3次面	陶器	肥前系	碗1
		瀬戸美濃系	碗1
	磁器	肥前系	不明2,瓶1
		瀬戸美濃系	蓋1
3次面	土器	在地	皿68,不明47,サナ1,内黒1
	陶器	肥前系	碗27,皿15,搦鉢3,鉢1,袋物3,香炉1,不明2
		瀬戸美濃系	碗6,搦鉢3,袋物1
		京信楽系	碗2
		越中瀬戸焼	皿2
		不明	袋物1,土瓶1,不明7
	磁器	肥前系	碗33,小杯3,皿4,鉢2,蓋3,袋物7,香炉1,青磁1,白磁碗1,不明1
		瀬戸美濃系	碗2
		不明	碗2
		青磁	不明
	瓦	不明	燻瓦10,古代瓦7
白磁	不明	皿1	
瓦器	不明	火鉢2	
3次面下層	磁器	肥前系	皿1

## 参 考 文 献

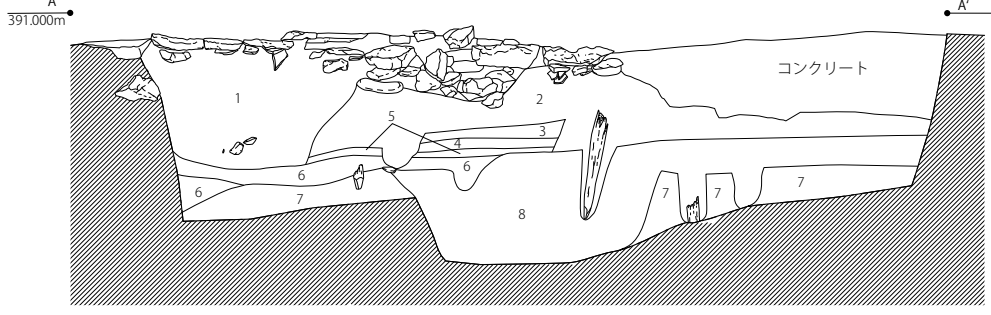
- 愛知県 2007 『愛知県史』別編 窯業 2 中世・近世瀬戸系
- 江戸遺跡研究会 2001 『図説・江戸考古学研究事典』 柏書房
- 大橋康二 1988 「18 世紀における肥前磁器の銘款について」 『青山考古』 6 号
- 九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年』
- 小林計一郎 1994 「古人の想いに包まれて」 『藤屋御本陳』
- 桜井準也 2006 『ガラス瓶の考古学』 六一書房
- (財) 瀬戸市埋蔵文化財センター 2006 『江戸時代のやきもの』
- 全国シンポジウム実行委員会 2005 『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～ 発表要旨集』
- 全国シンポジウム実行委員会 2005 『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～ 資料集』
- 土岐市教育委員会 2006 『窯ヶ根窯発掘調査報告書』
- 永井久美男 2002 『中世出土銭の分類図版』 高志書院
- 長佐古真也 2012 「消費地から見た瀬戸・美濃窯～ご飯茶碗を中心に～」 『平成 23 年度財団法人瀬戸市文化振興財団シンポジウム 瀬戸美濃窯の近代～生産と流通～』
- 長野市教育委員会 1998 『長野遺跡群 西町遺跡』 長野市の埋蔵文化財第 87 集
- 長野市教育委員会 2006 『長野遺跡群 善光寺門前町跡』 長野市の埋蔵文化財第 115 集
- 長野市教育委員会 2008 『長野遺跡群 元善町遺跡 善光寺門前町跡 (2)』 長野市の埋蔵文化財第 121 集
- 長野市教育委員会 2014 『長野遺跡群 善光寺門前町跡 (3)』 長野市の埋蔵文化財第 135 集
- 元善町誌編集委員会 1980 『善光寺門前町百年の歩み 長野市元善町誌』
- 藤澤良祐 2008 『中世瀬戸窯の研究』 高志書院
- 堀内秀樹 2010 「都市江戸における貿易陶磁器の消費－江戸の需要とその背景－」 江戸遺跡研究会編 『都市江戸のやきもの』
- 水澤幸一 1999 「瓦器、その城館的なるもの－北東日本の事例から－」 『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』 第 9 集
- 宮田進一 1988 「越中瀬戸の窯資料 (1)」 『大境』 第 12 号
- 村上伸之 1999 「肥前における明・清磁器の影響」 『貿易陶磁研究』 No. 19
- 室賀明 1984 『八幡屋磯五郎の七味唐がらし』







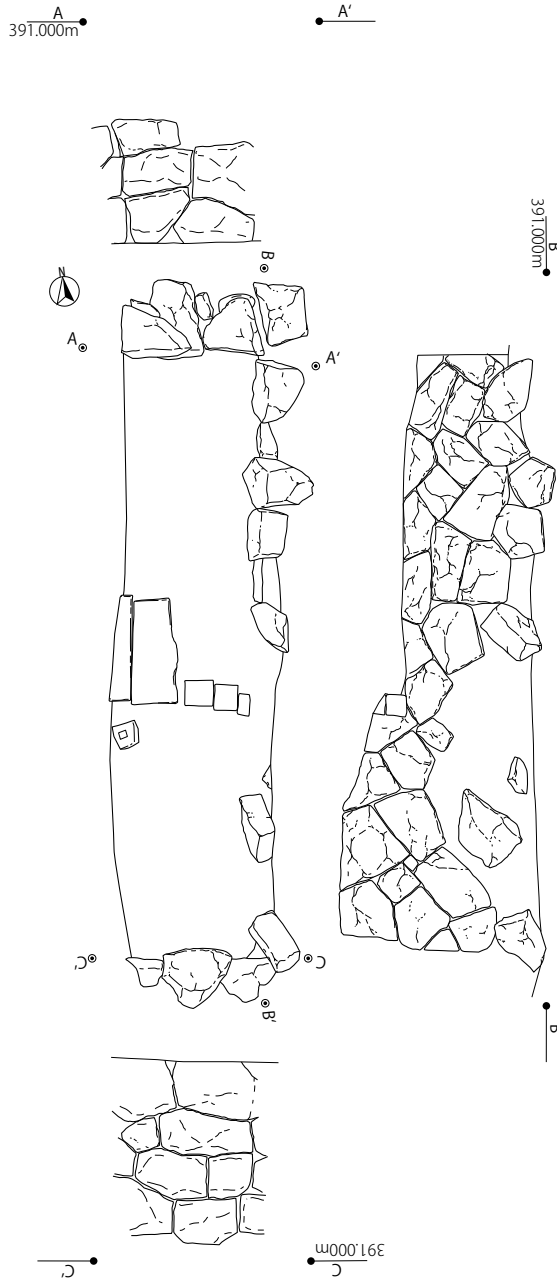
調査区南西壁土層断面



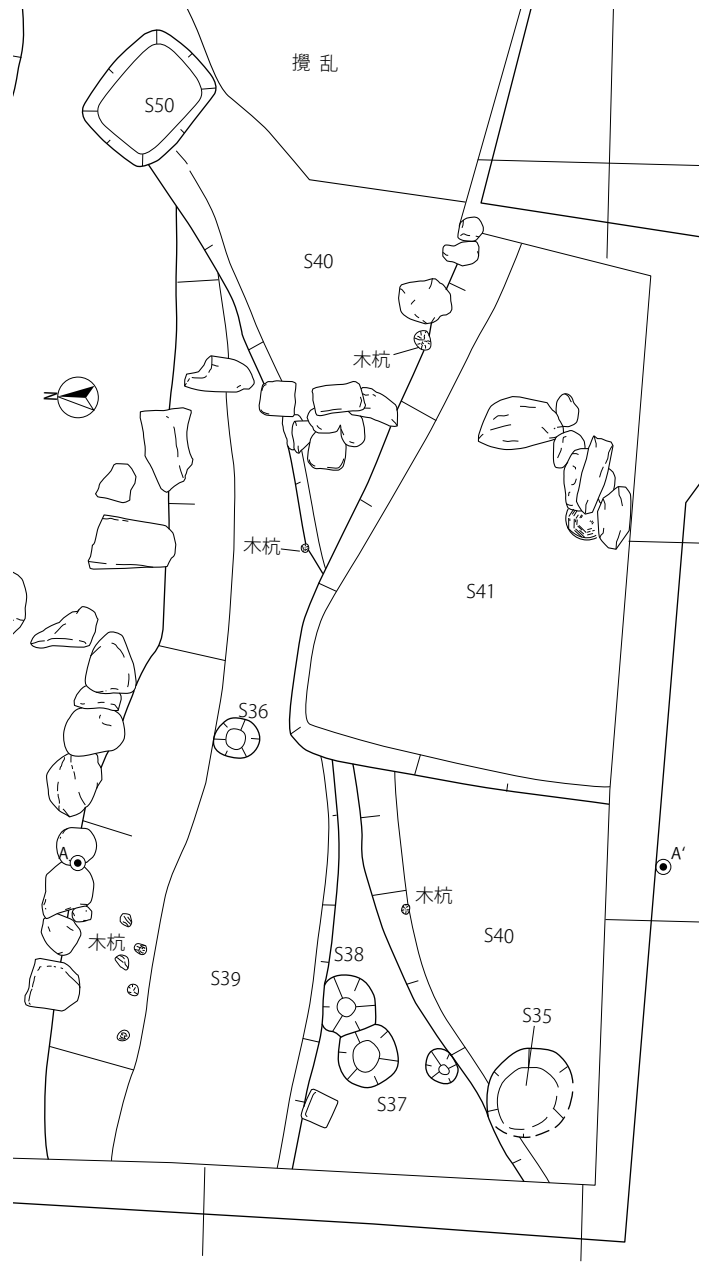
- 1. 暗褐色シルト質土 黄灰色砂・礫・炭化物・焼土粒混
- 2. 暗褐色土 炭化物・焼土粒混
- 3. 黄色砂質土 礫・炭化物・焼土粒混 (2次面)
- 4. 暗褐色シルト質土 炭化物混
- 5. 黄灰色粘質土 暗褐色土混 (3次面)
- 6. 暗褐色シルト質土 炭化物・橙色粒混
- 7. 茶褐色シルト質土 砂礫混 (中世)
- 8. 暗褐色シルト質土 灰色粘質土・黄色砂礫・炭化物・焼土混



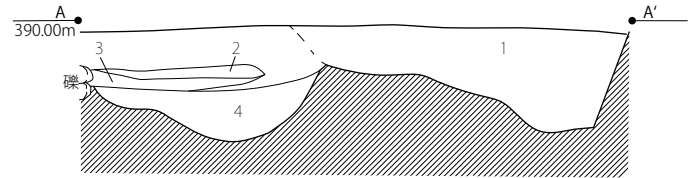
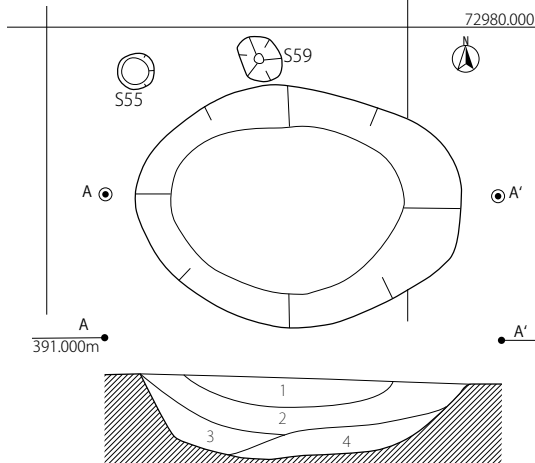
62号遺構



39・40号遺構



52号遺構

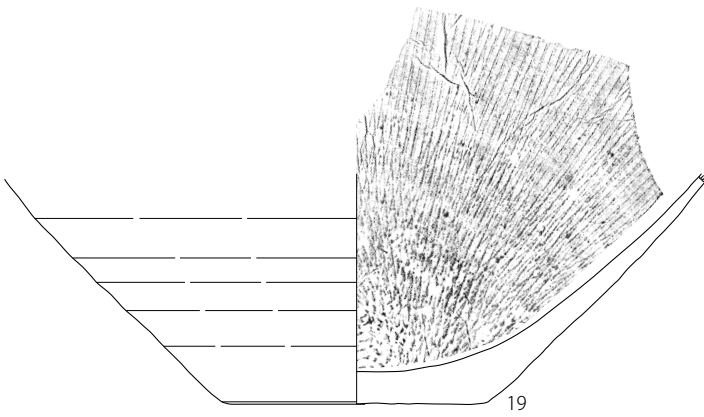
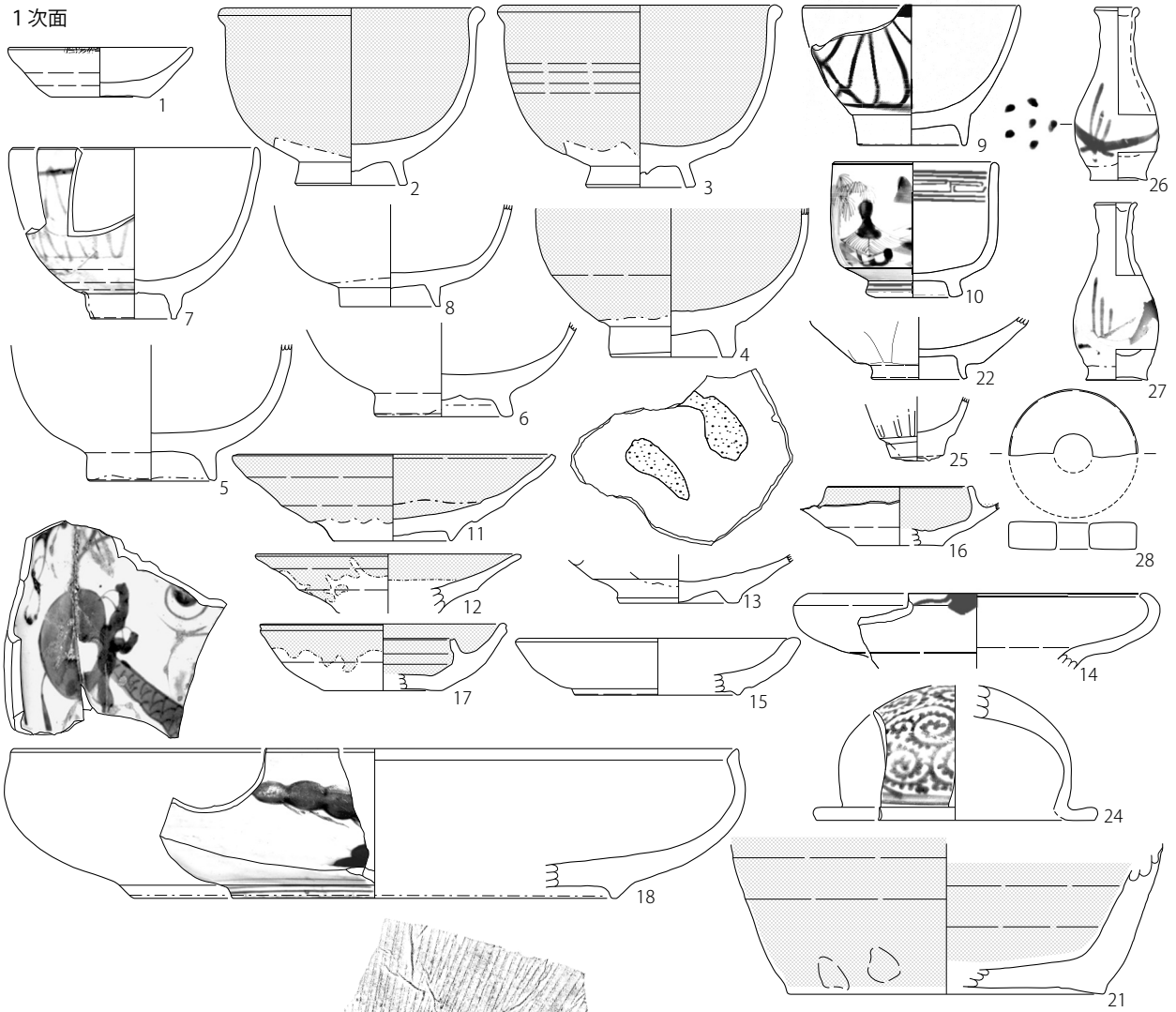


1. 暗褐色シルト質土 黄色砂多混、礫・炭化物・焼土少混
2. 暗褐色シルト質土
3. 灰色粘質土・白色砂質土層状体積
4. 暗褐色シルト質土 黄色砂多混、礫・炭化物・焼土少混

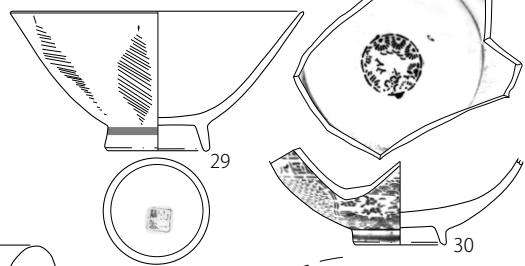
1. 暗褐色土 黄色砂・焼土・炭化物混
2. 炭化物層 焼土混
3. 焼土層 炭化物混
4. 暗褐色土 黄色砂・焼土・炭化物混

0 10cm S=1:40 1m

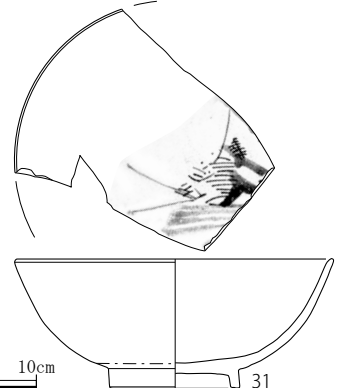
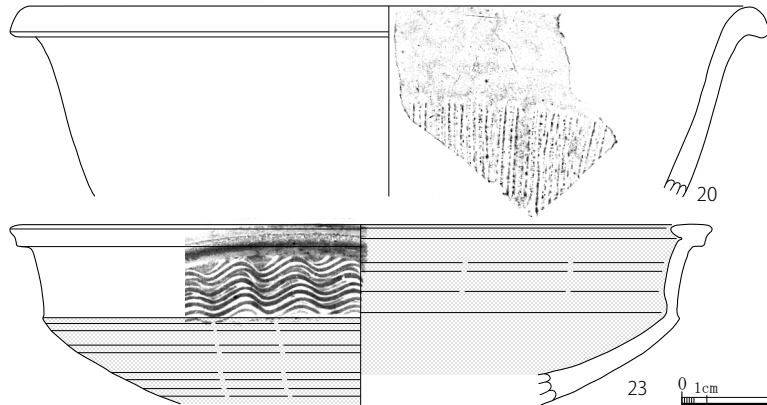
1次面



石列 1・2

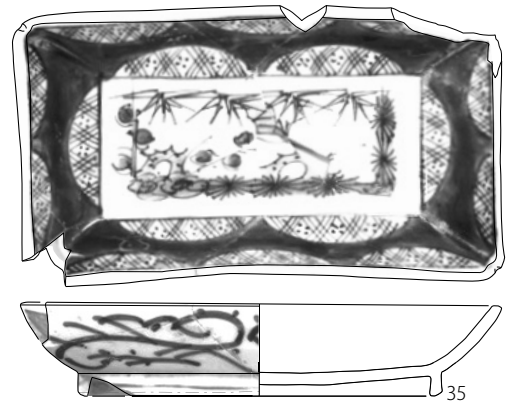
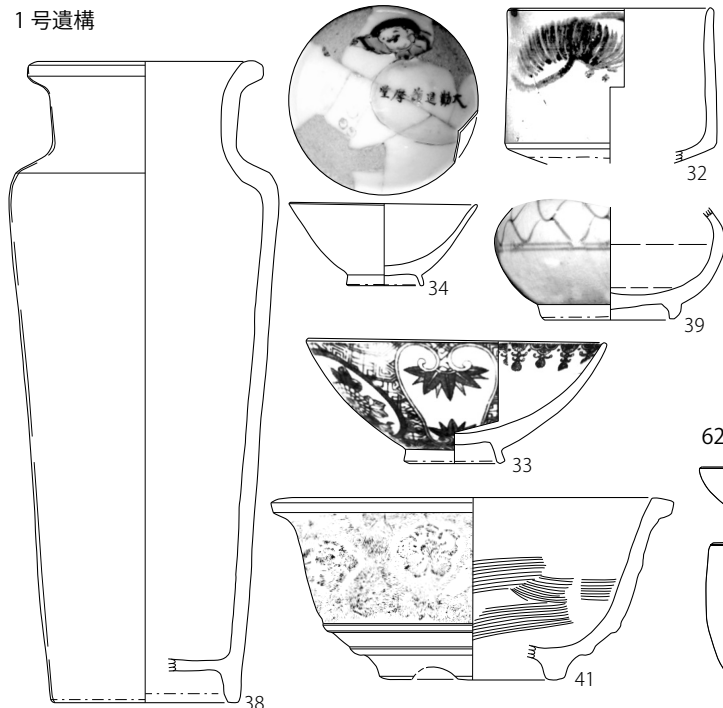


石列 4

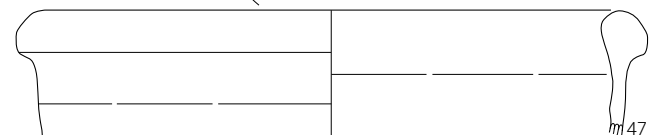
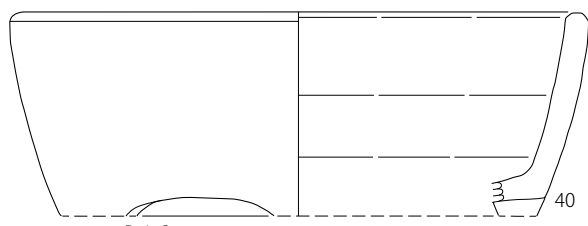
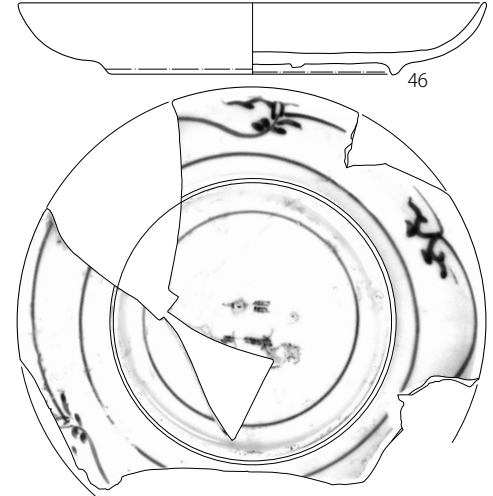
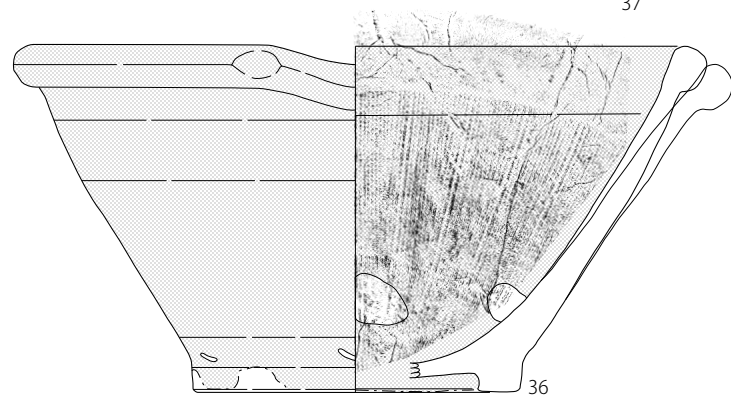
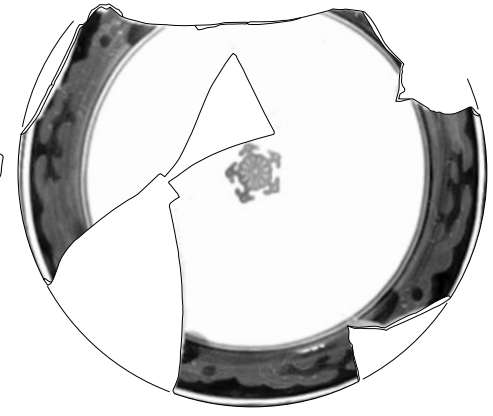
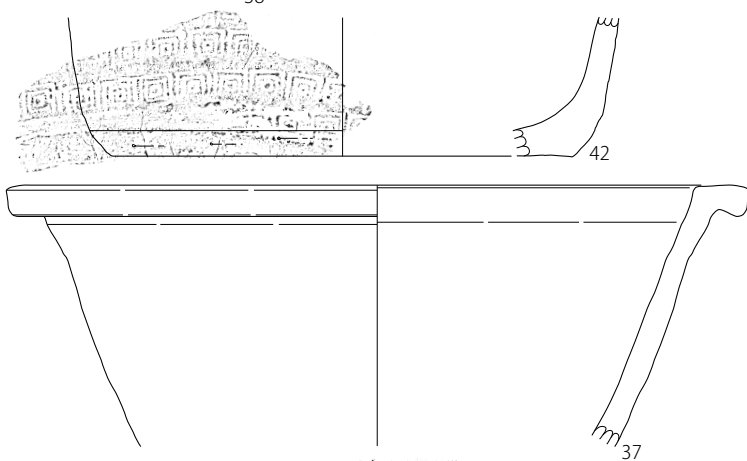
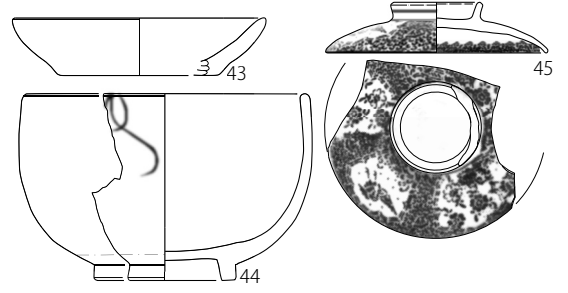


S=1:3  
0 1cm 5cm 10cm

1号遺構

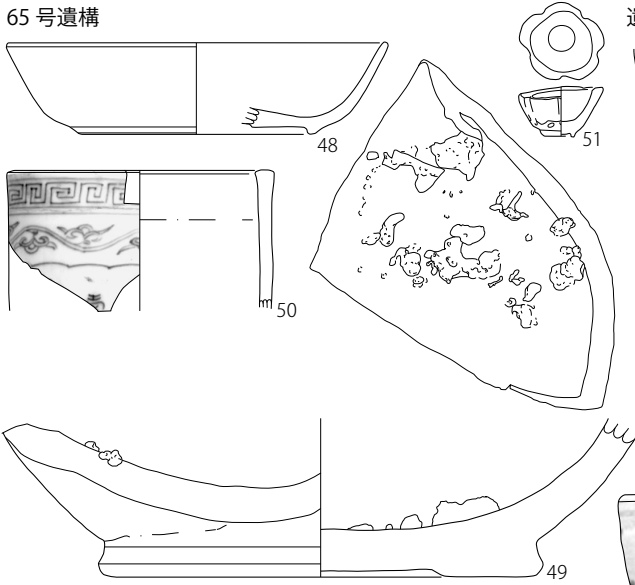


62号遺構

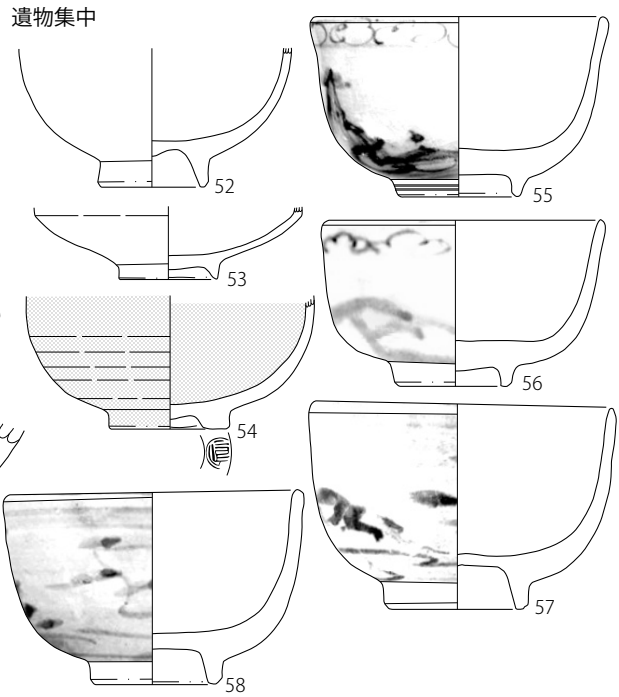


0 1cm 5cm 10cm  
S=1:3

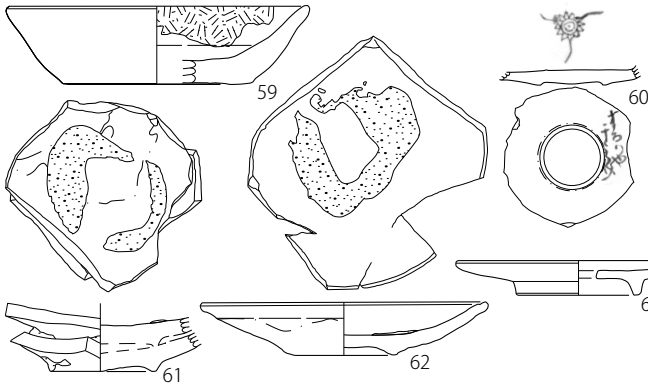
65号遺構



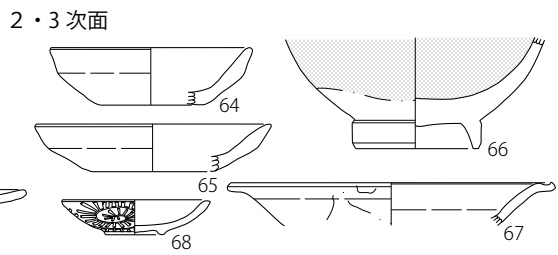
遺物集中



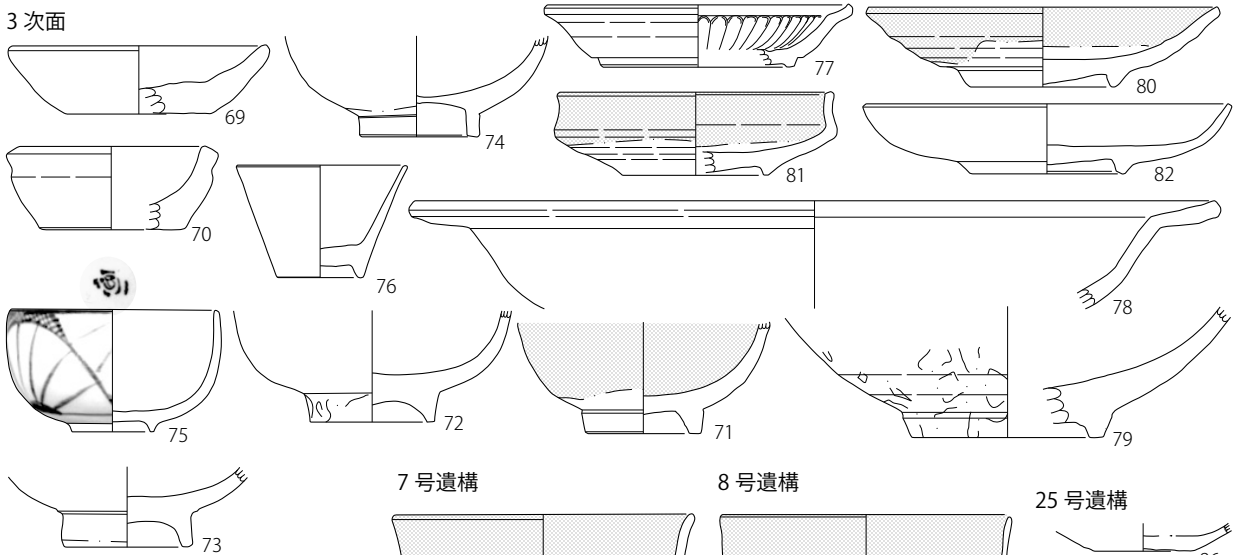
2次面



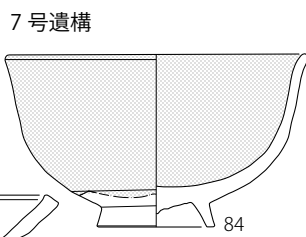
2・3次面



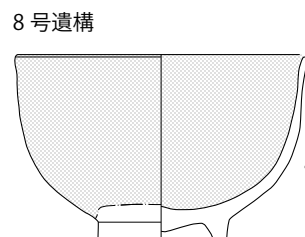
3次面



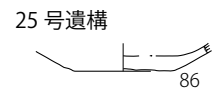
7号遺構



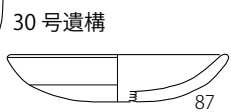
8号遺構



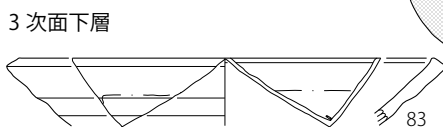
25号遺構



30号遺構

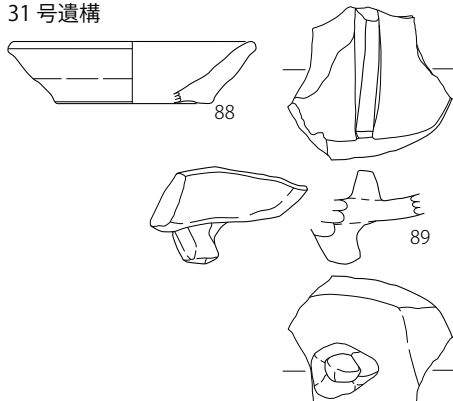


3次面下層

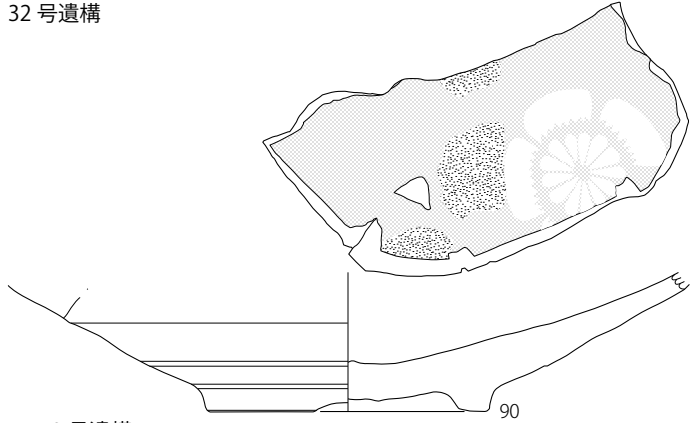


85 0 1cm S=1:3 5cm 10cm

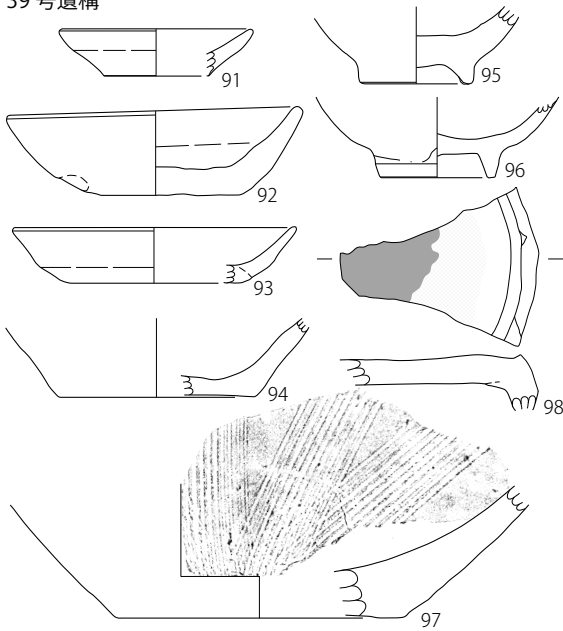
31号遺構



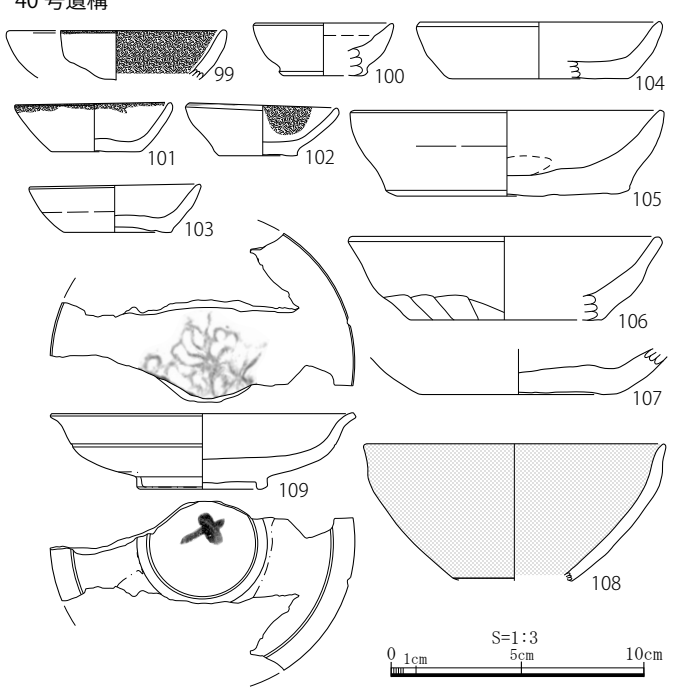
32号遺構



39号遺構

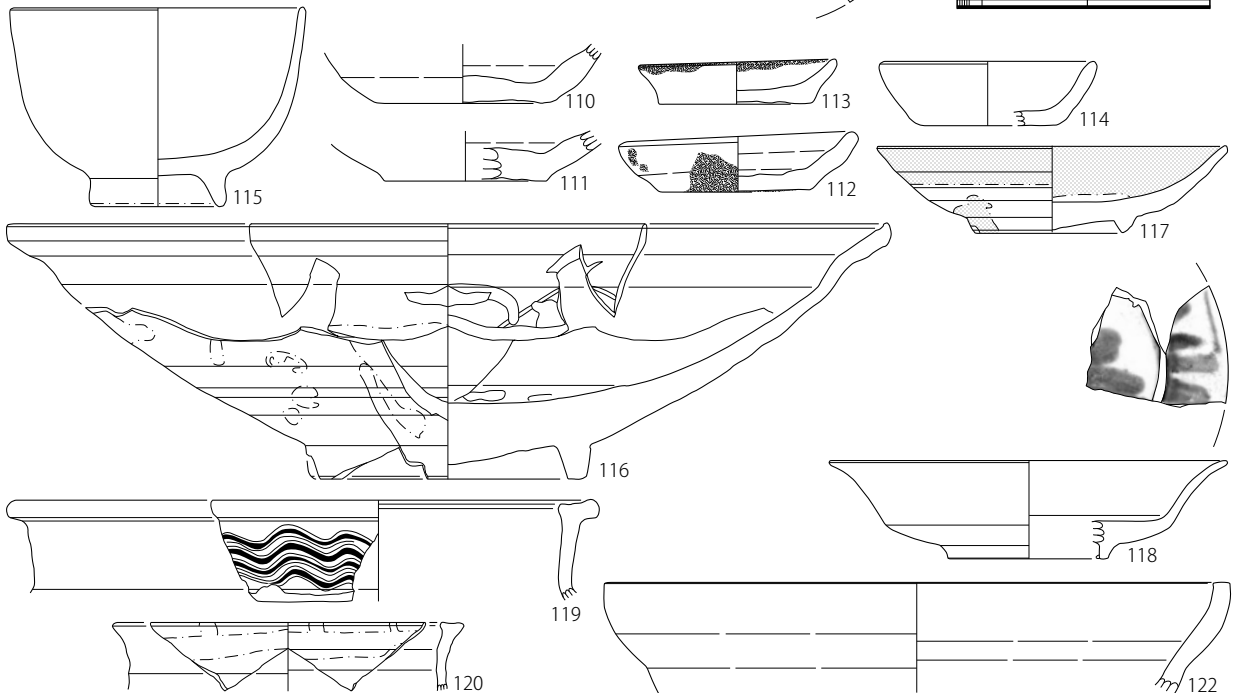


40号遺構

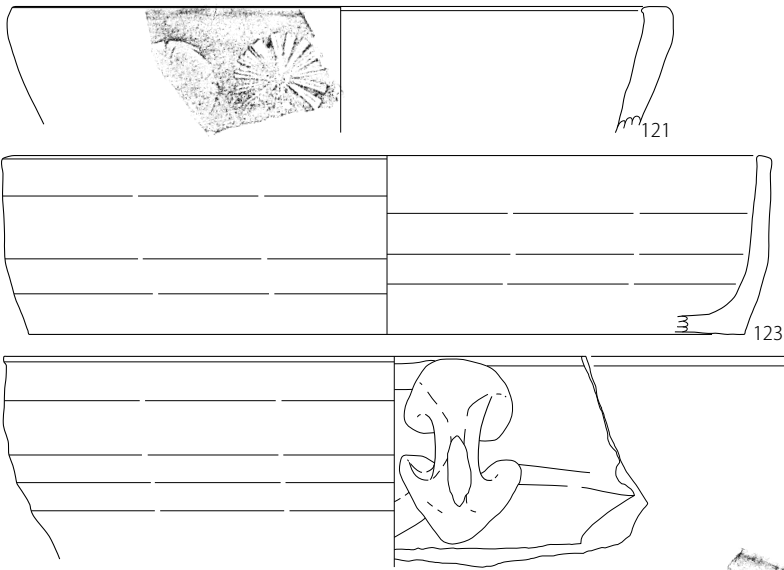


S=1:3  
0 1cm 5cm 10cm

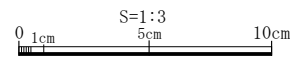
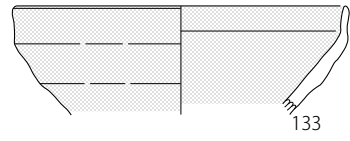
41号遺構 (1)



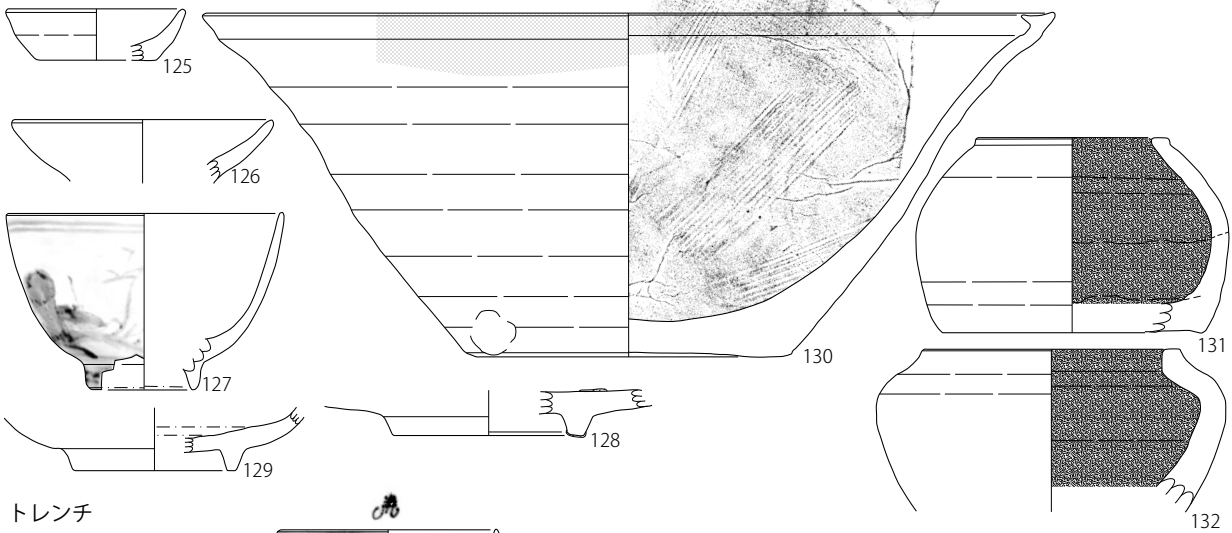
41号遺構 (2)



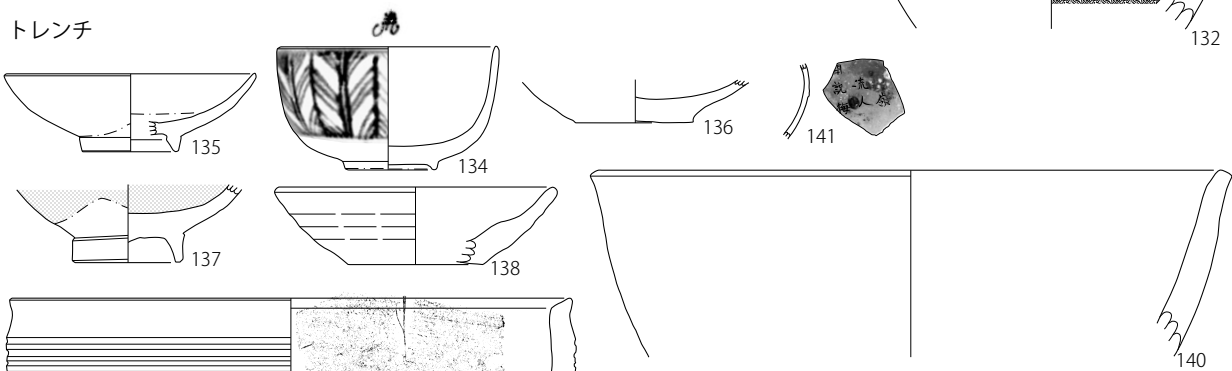
54号遺構



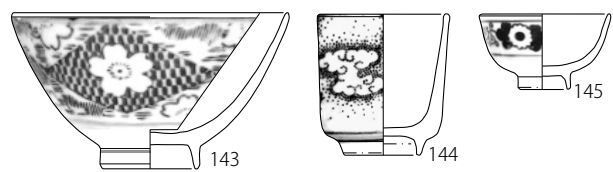
52号遺構



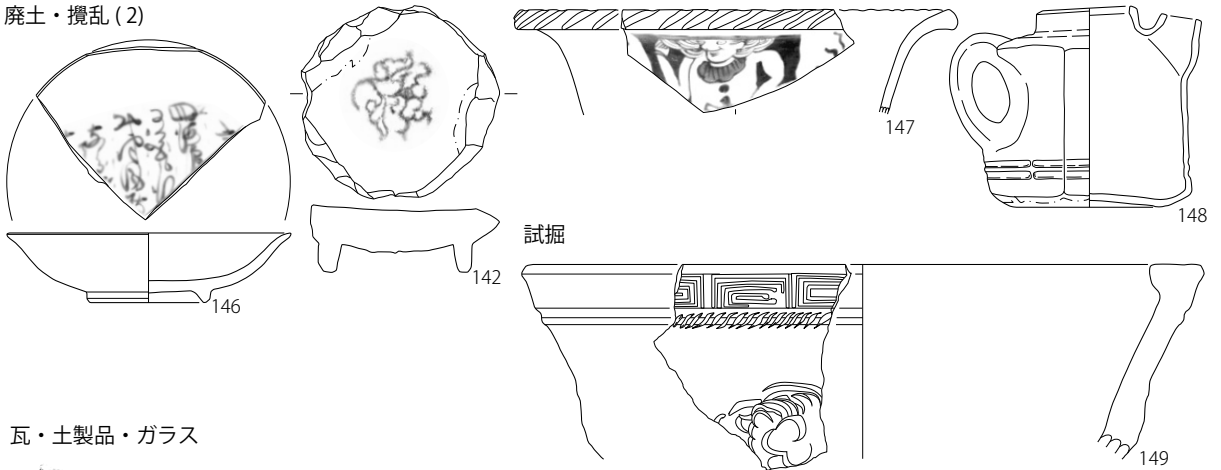
トレンチ



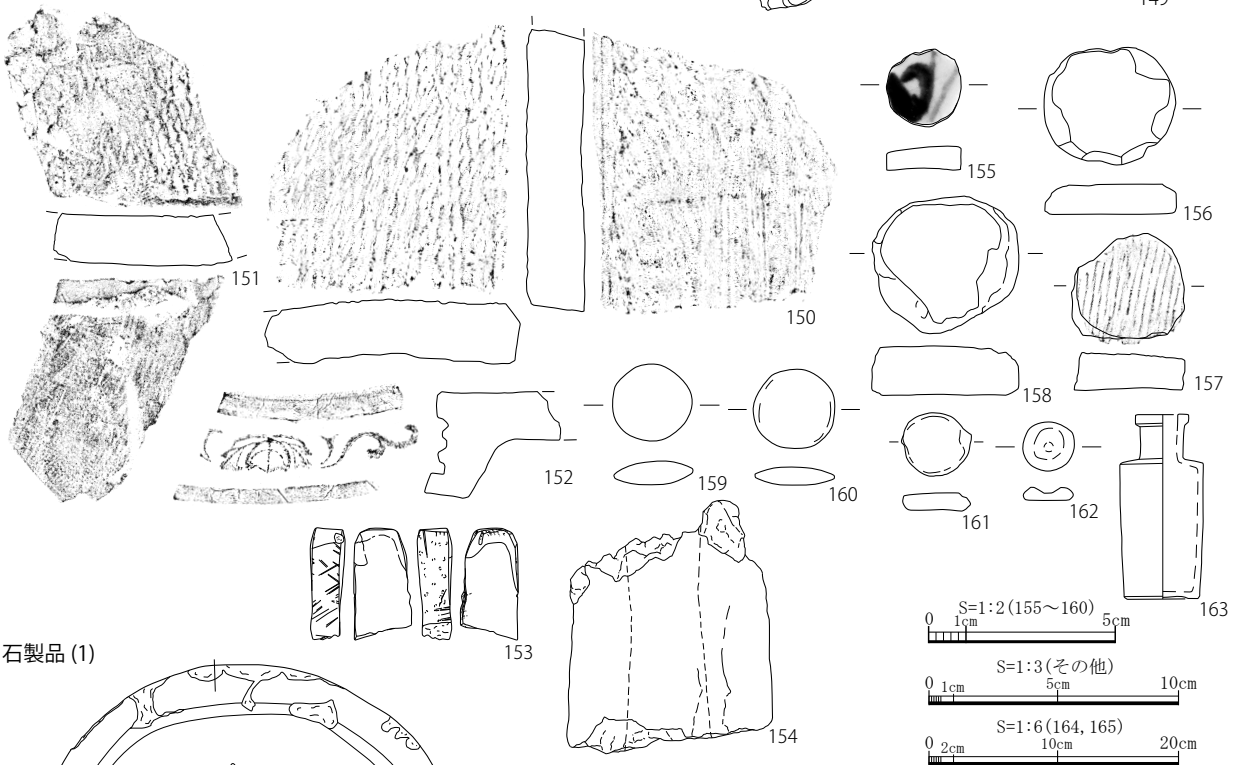
糜土・攪乱 (1)



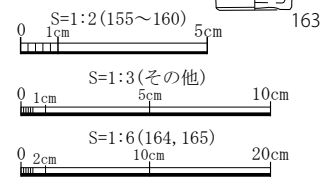
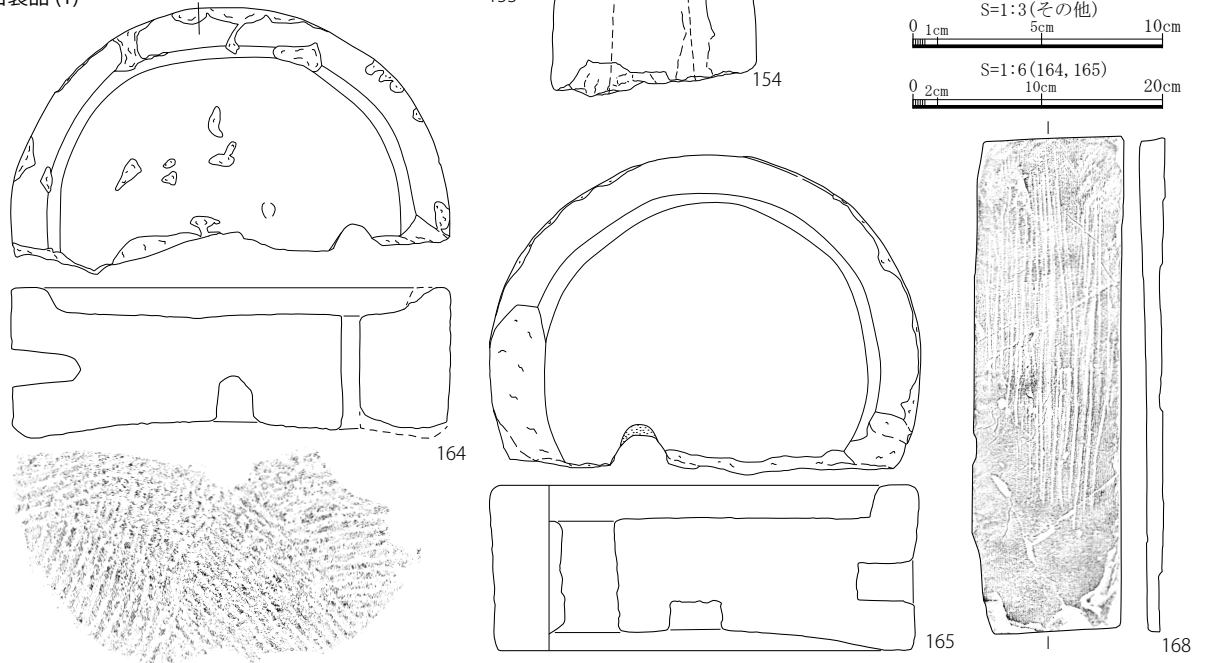
廃土・攪乱 (2)



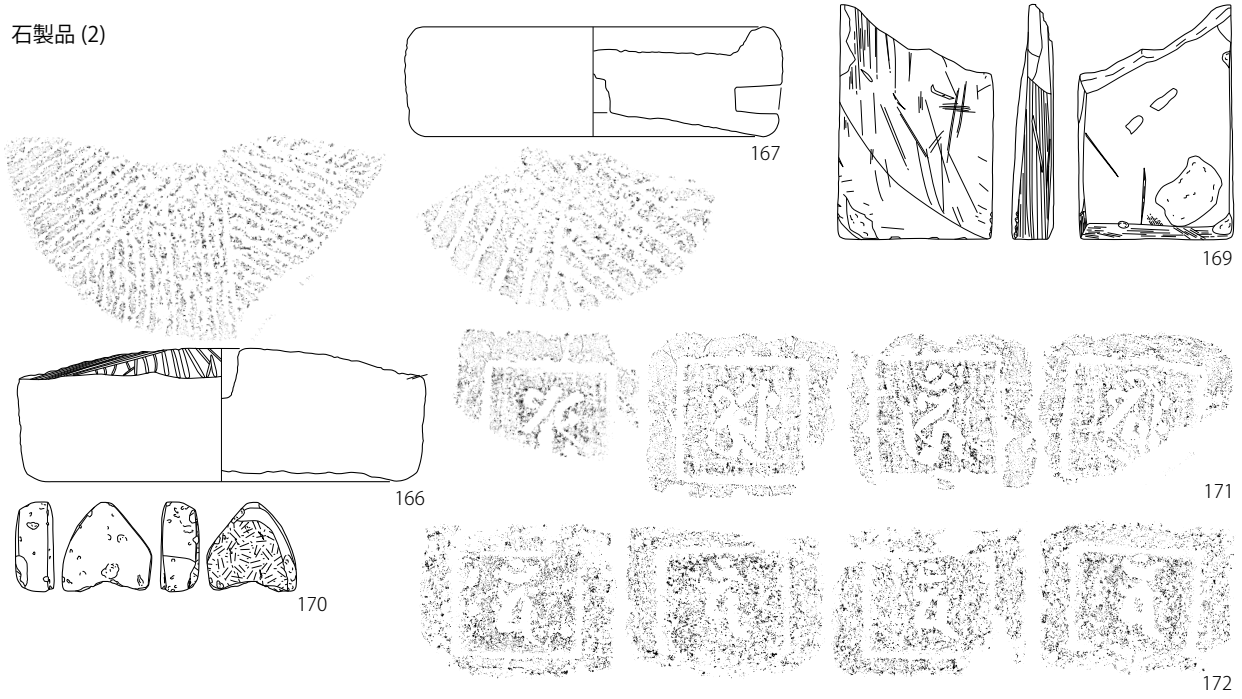
瓦・土製品・ガラス



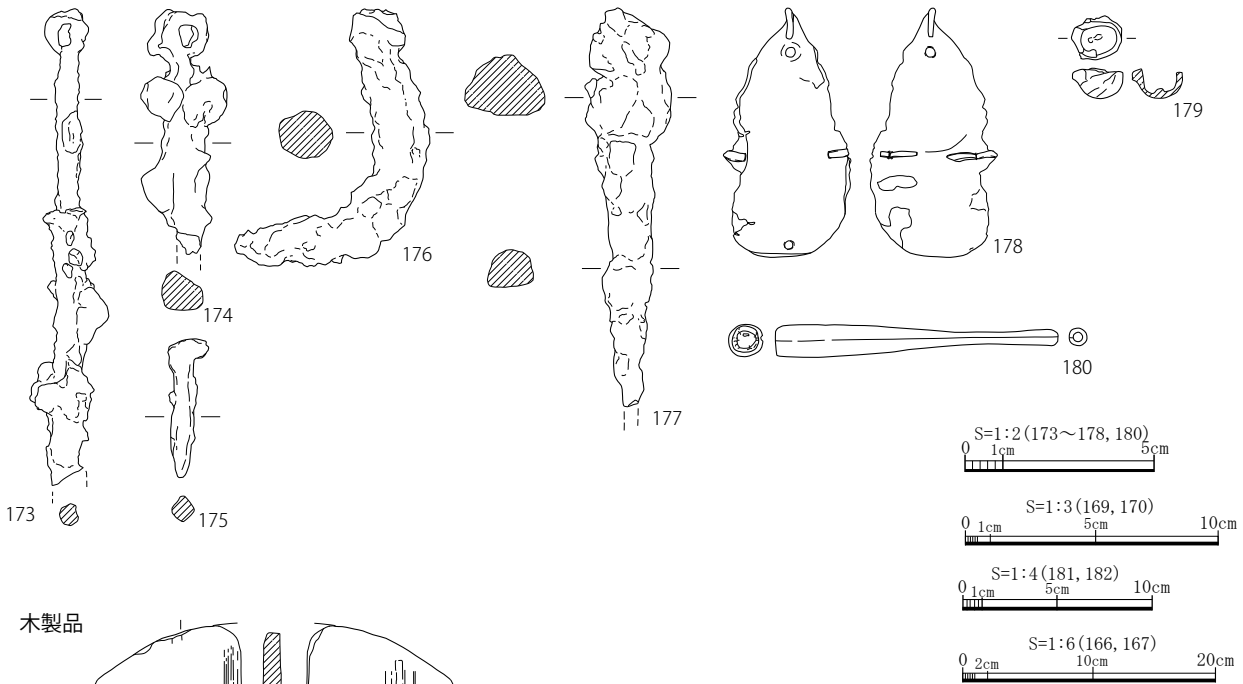
石製品 (1)



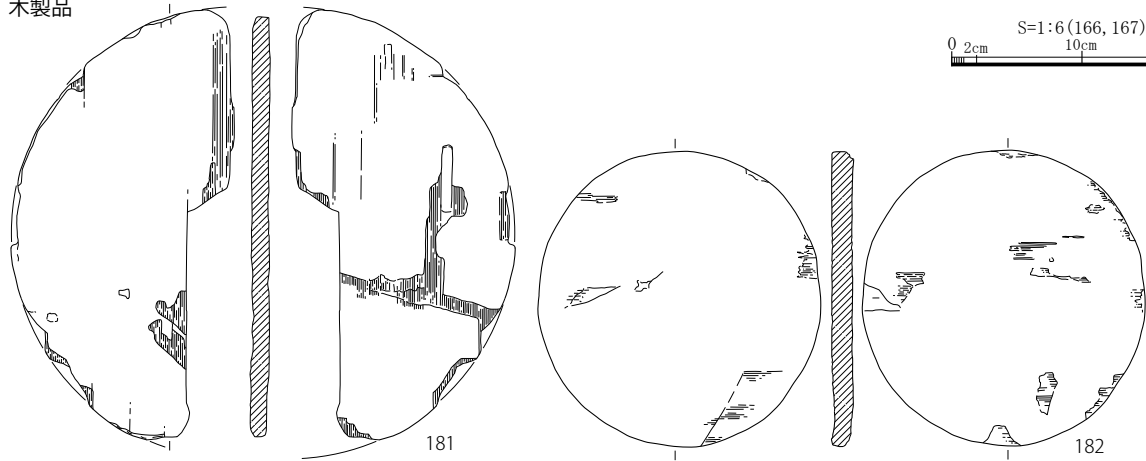
石製品 (2)



金属製品



木製品







1次面全景（南から）



2次面全景（南から）



3次面全景（南から）



井戸跡（南から）



遺物集中出土状況



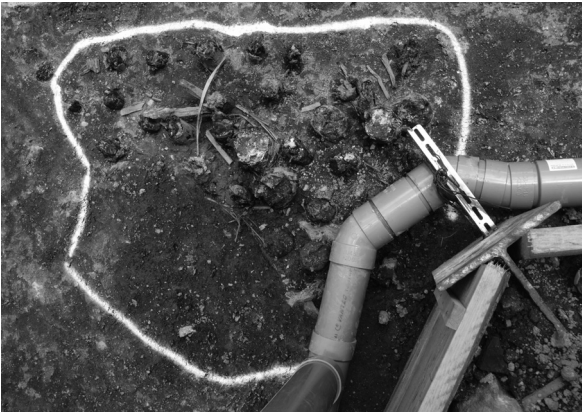
石列 1・2 (北から)



1号遺構完掘状況 (東から)



1号遺構土層断面 (西から)



杭列検出状況



1号遺構下層土層断面 (西から)



杭列土層断面 (西から)



62号遺構完掘状況 (北から)



39・40・41号遺構完掘状況（東から）



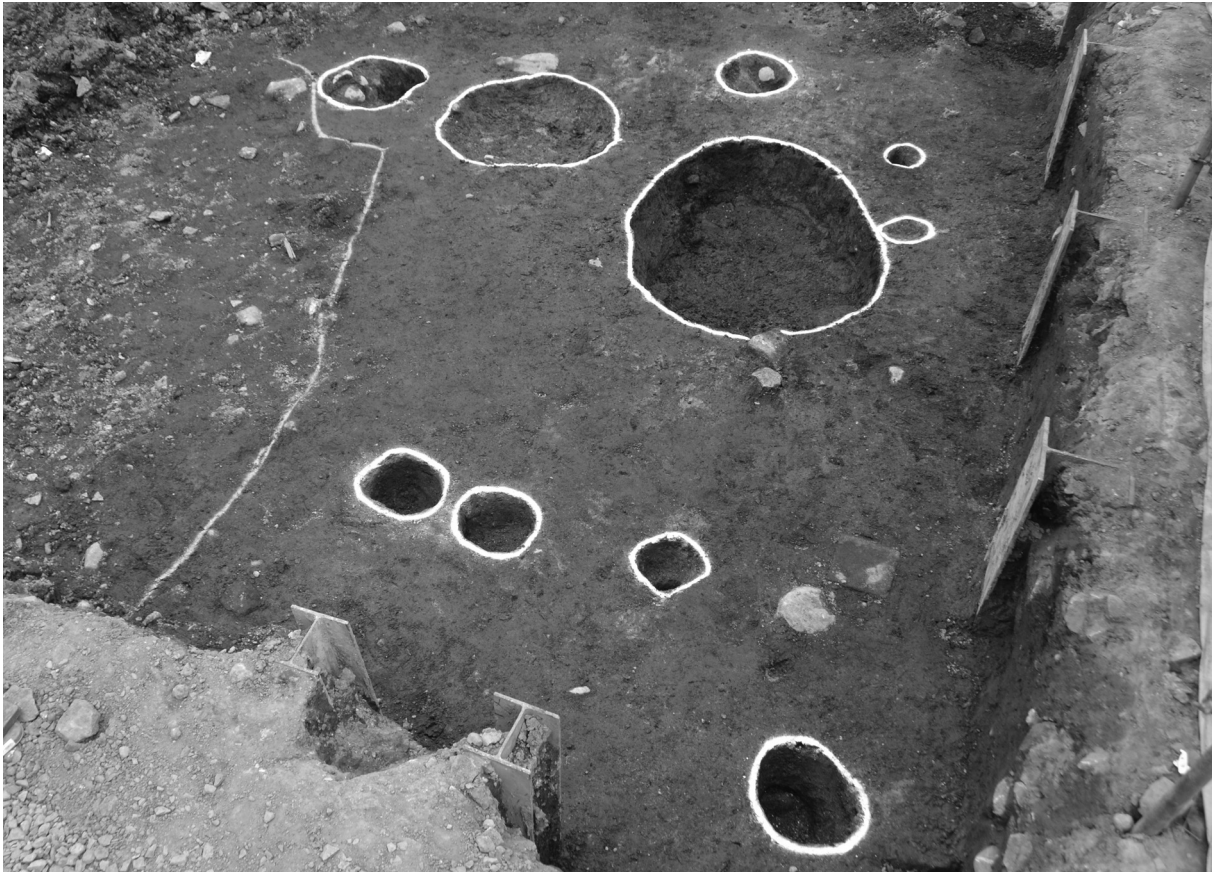
3次面北半遺構完掘状況（北から）



東調査区1次面全景（北東から）



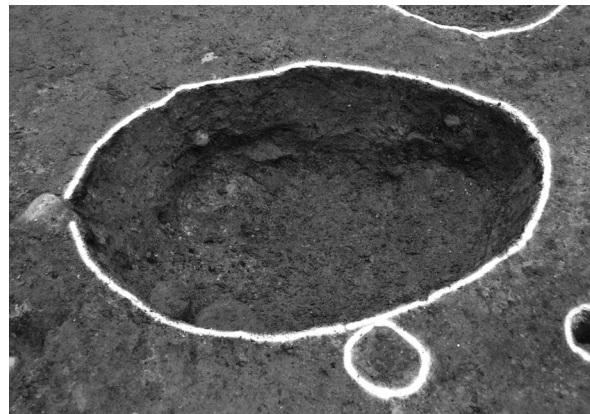
東調査区2次面全景（北東から）



東調査区 3 次面全景 (北東から)



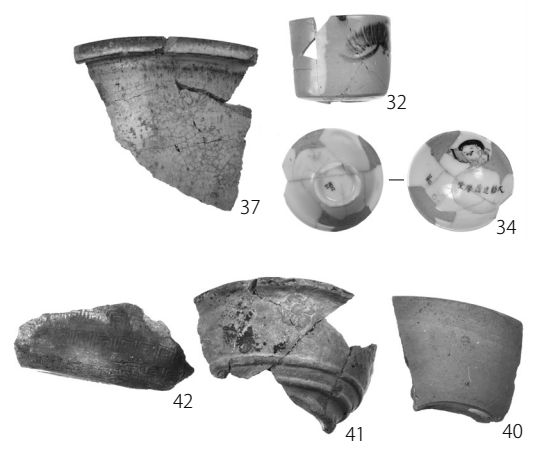
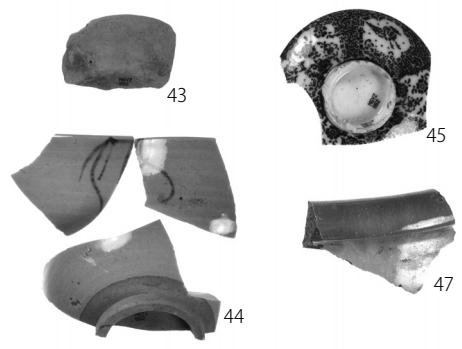
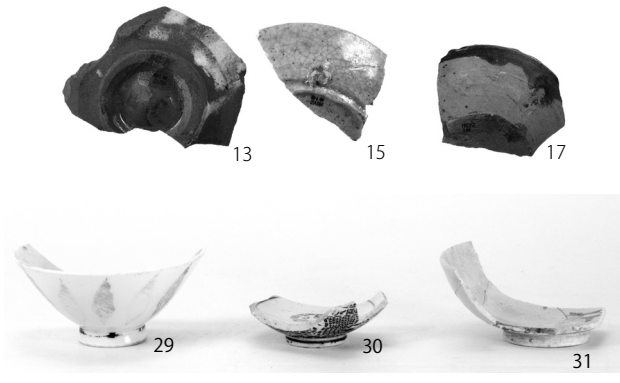
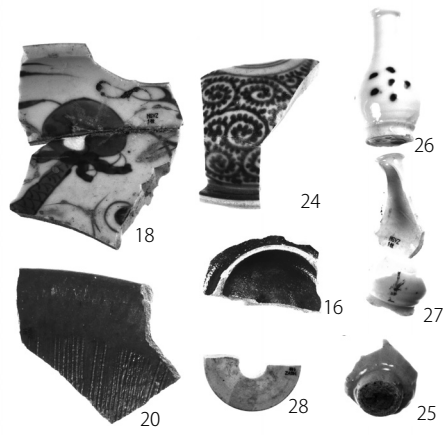
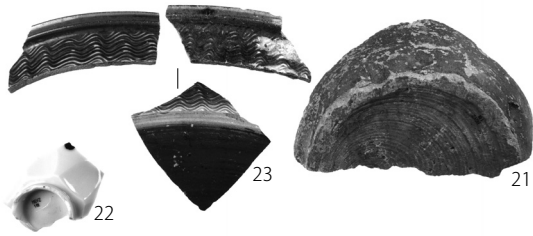
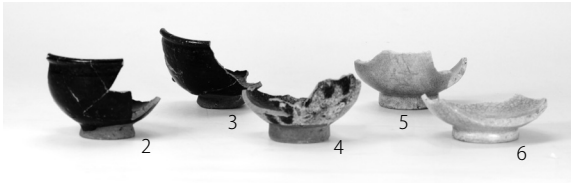
52 号遺構土層断面 (南から)

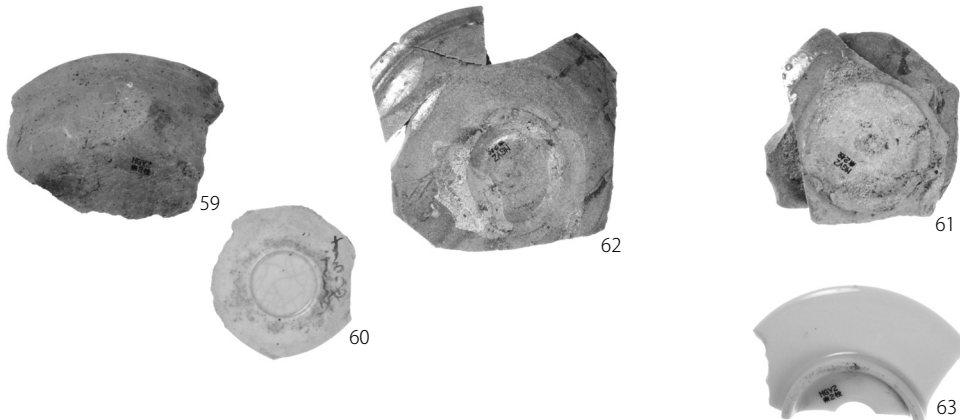
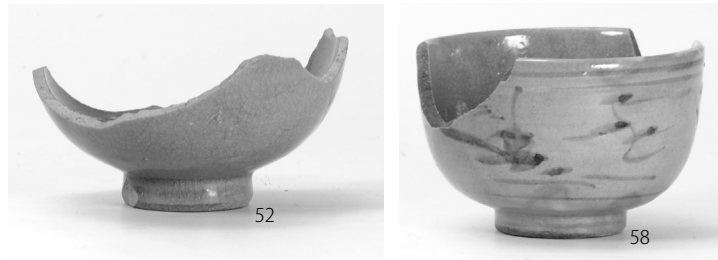
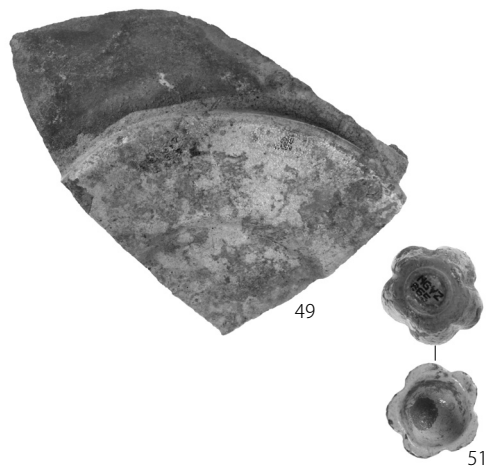
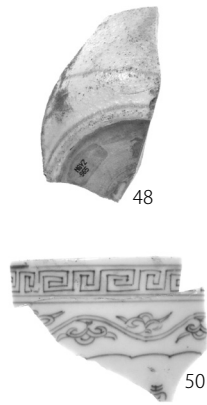


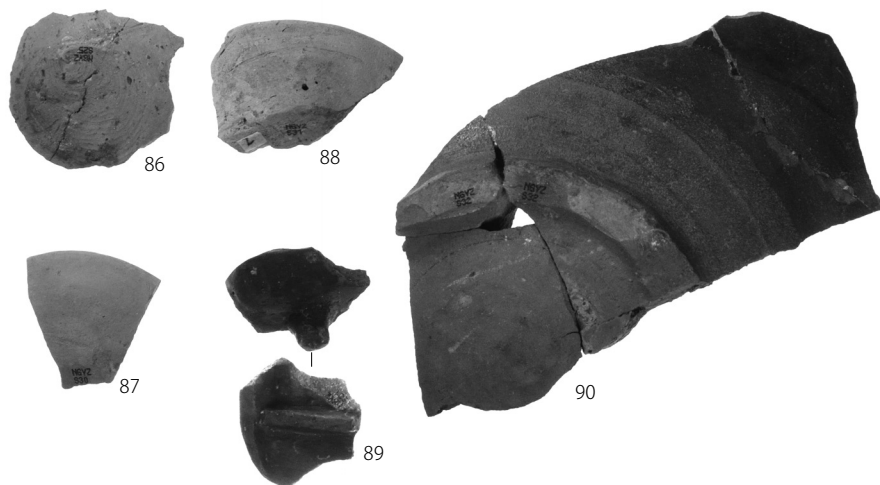
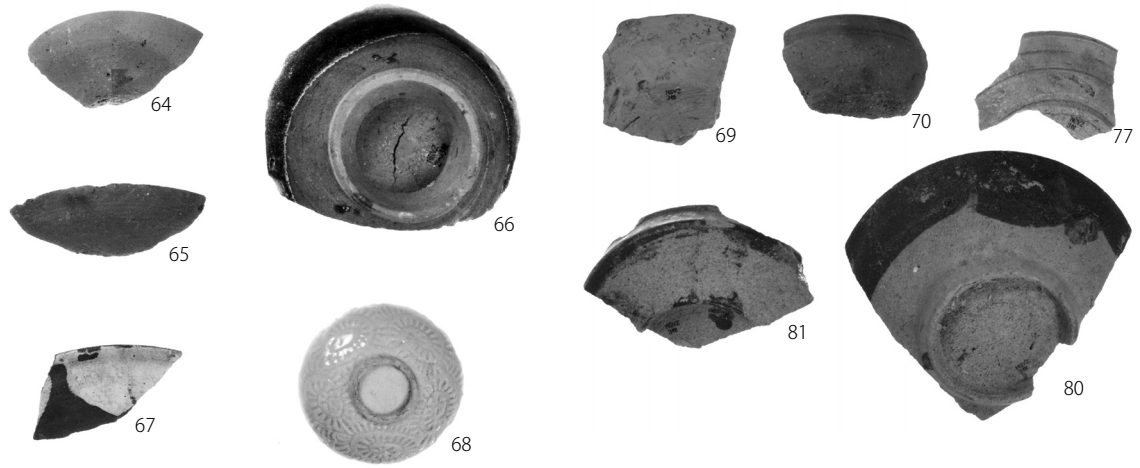
52 号遺構完掘状況 (北から)



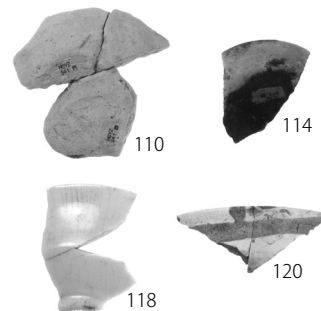
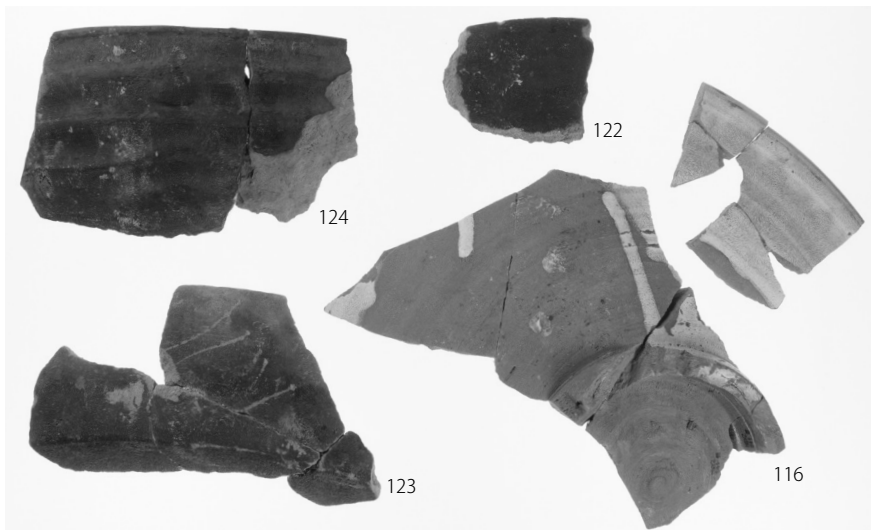
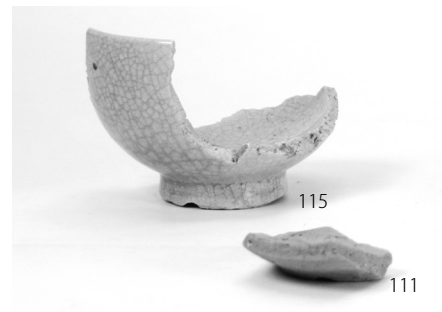
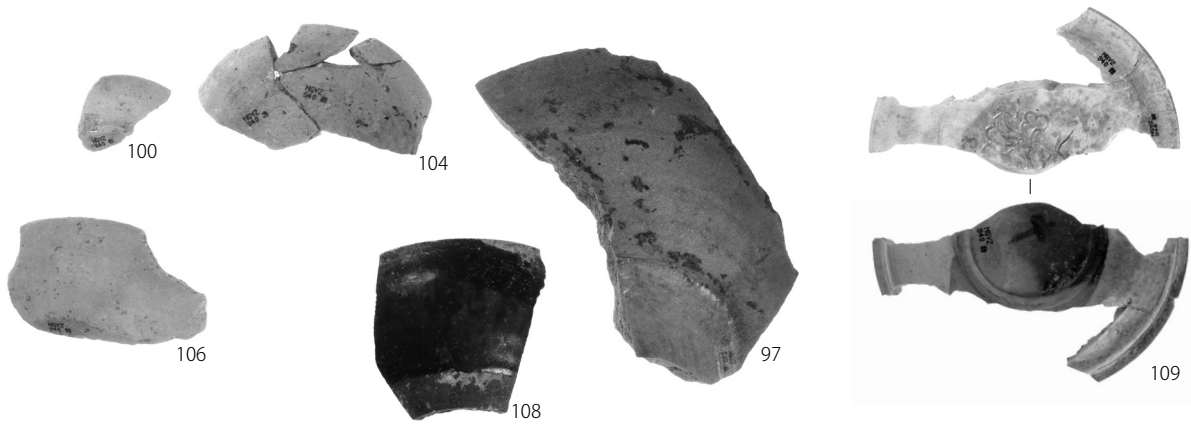
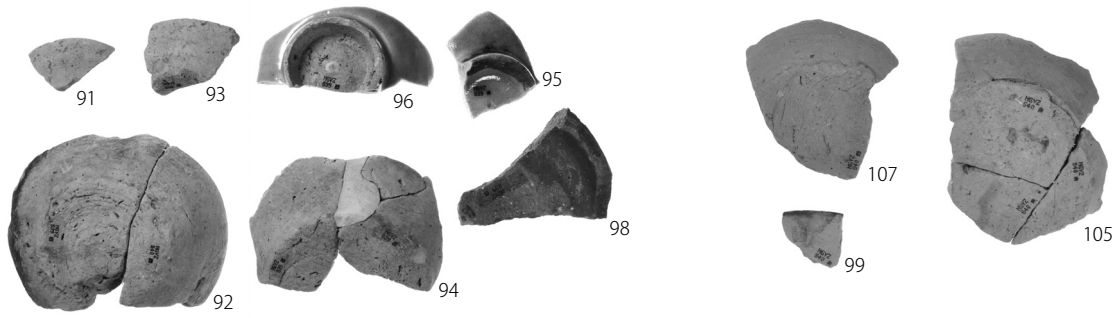
55 号遺構土層断面 (東から)



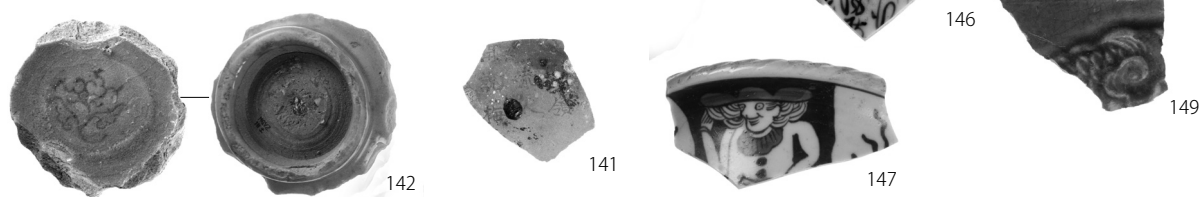
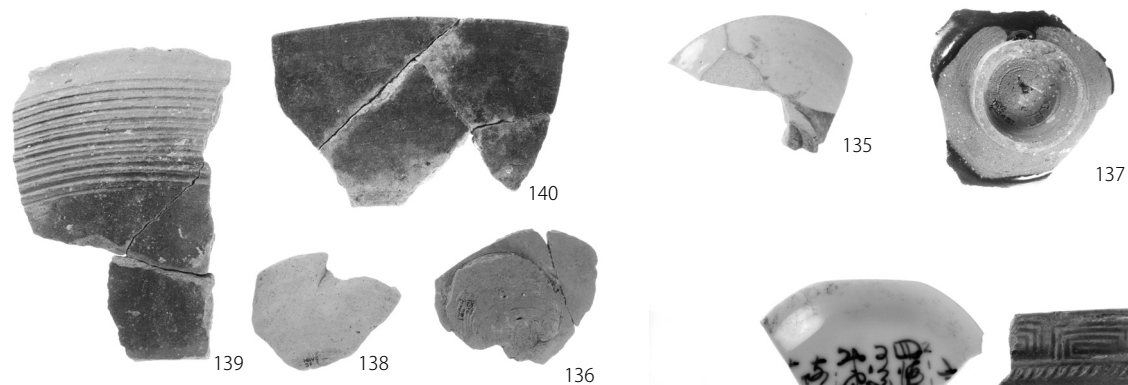
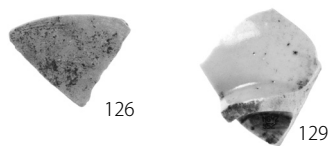
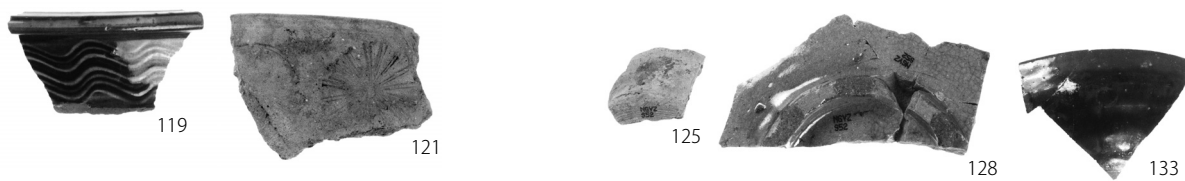


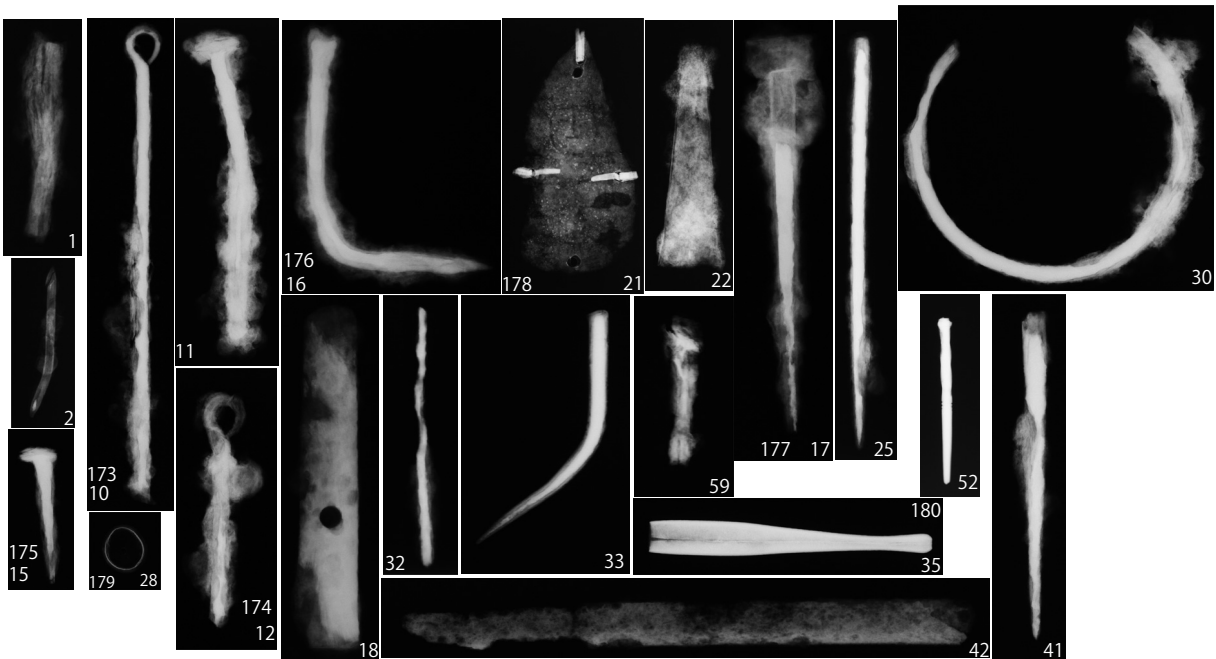
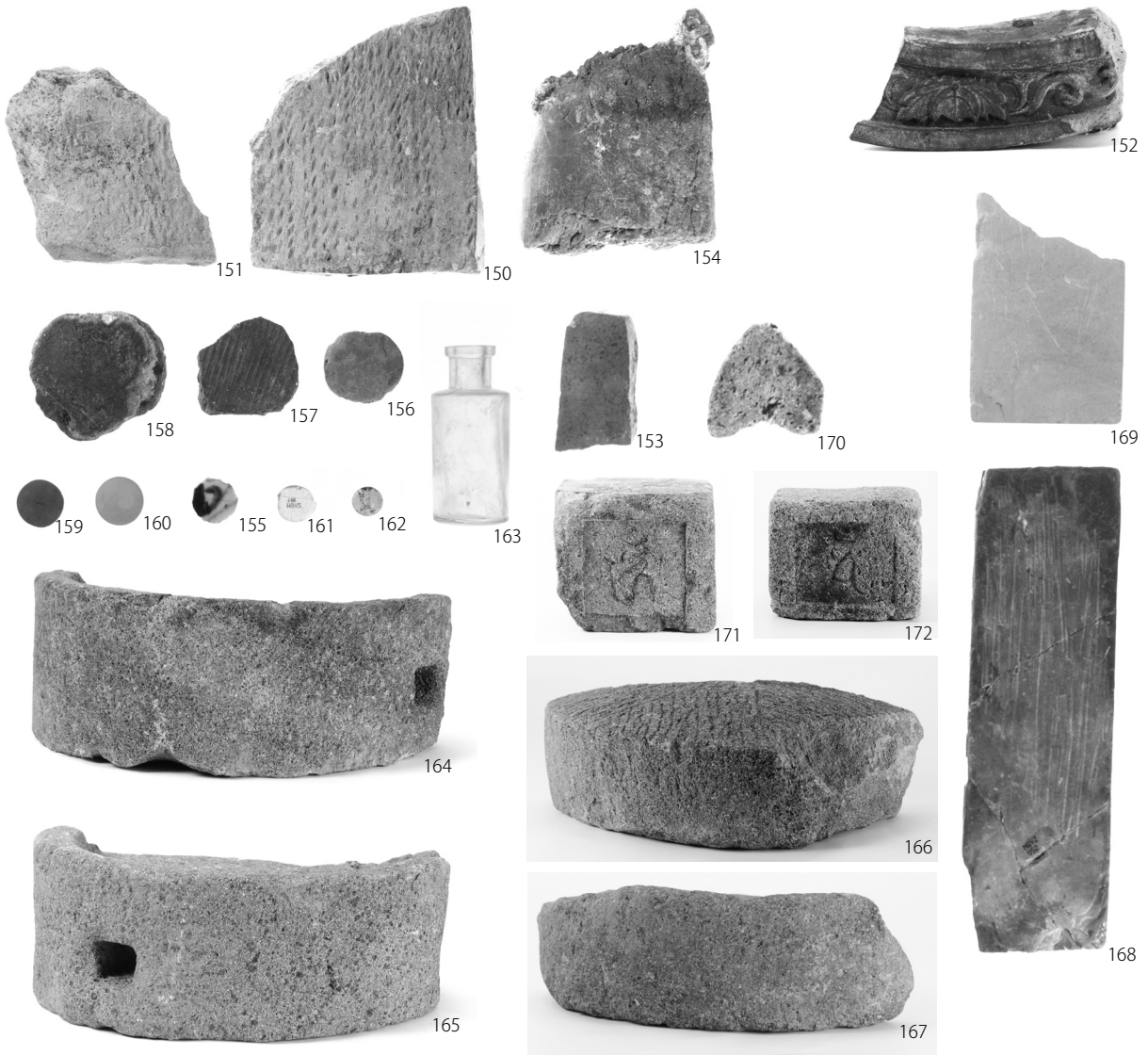


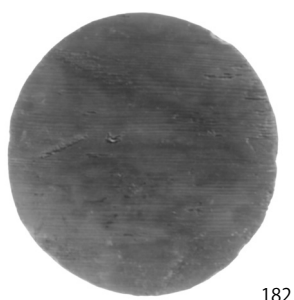
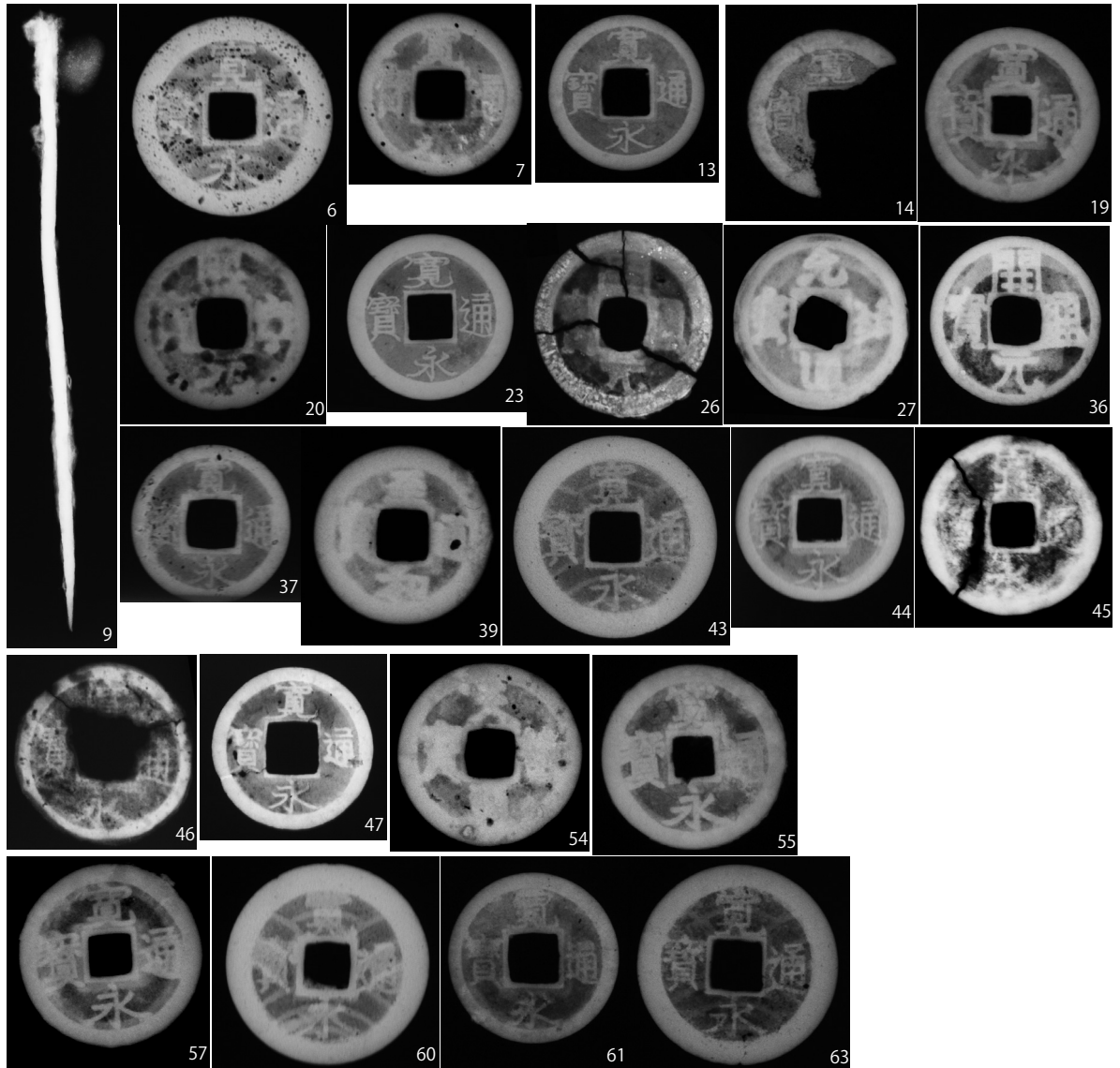
写真图版 8











# 報告書抄録

ふりがな	ながのいせきぐん ぜんこうじもんぜんまちあと							
書名	長野遺跡群 善光寺門前町跡 (4)							
副書名	－八幡屋儀五郎大門町店増築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－							
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財							
シリーズ番号	第 142 集							
編著者名	飯島哲也 田中暁徳							
編集機関	長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センター							
所在地	〒381-2212 長野県長野市小島田町 1414 番地 TEL 026-284-0004 FAX 026-284-0106							
発行年月日	2016(平成 28)年 3 月 25 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ぜんこうじもんぜんまちあと 善光寺門前町跡	ながのけんながのしながの 長野県長野市長野 だいもんちろう 大門町 86-1 他	20201	C-018	36° 39′ 26″	138° 11′ 15″	20140417 ～ 20140603	120 m <sup>2</sup>	店舗建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
善光寺門前町跡	集落跡	中世	溝・建物跡		陶磁器・土器皿・内耳鍋・瓦質香炉		中世末期～近世初頭の良いな遺物群	
		近世	溝・土坑・ピット・建物跡		陶磁器・土器皿・内耳鍋・金属製品・銭貨・土製品・石製品・木製品		弘化 4 年の大火の廃棄土坑	
		近代	石組溝・井戸・水場遺構 地下室・建物跡		陶磁器・ガラス製品・金属製品・土製品・石製品・赤色顔料		井戸と一体となる水場遺構 門前町の町割	
要約	<p>善光寺門前町で参道と直交する横町通りに面する町屋跡の調査。中世～近代に亘る門前町の痕跡を検出した。中世では参道脇の南北溝に接続すると推測される 15 世紀の東西溝が検出された。各面に根石を基礎とする、重量建物跡が検出された。近世は 3 面の生活面が確認され、それぞれ 17 世紀代・18 世紀代・幕末～近代の年代が与えられ、周辺の過去の調査と一致している。生活面形成は門前町の火災による整地が契機と推定される。</p>							

長野市の埋蔵文化財第 142 集

長野遺跡群

## 善光寺門前町跡（4）

—八幡屋磯五郎大門町店増築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成 28 年 3 月 17 日 印刷

平成 28 年 3 月 25 日 発行

発行 長野市教育委員会

編集 文化財課埋蔵文化財センター

印刷 法規書籍印刷株式会社

